

横雲バイパス関係発掘調査報告書

かみごう

上郷遺跡 I

1994

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

横雲バイパス関係発掘調査報告書

かみごう

上郷遺跡 I

1994

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

新潟県教育委員会では、高速道路や国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

本書は、国道49号線横雲バイパス建設に伴い実施した、上郷遺跡の平成4年度分の調査結果をまとめた発掘調査報告書です。

上郷遺跡が所在している地域は、耕地整理された美田となっておりますが、江戸時代には横越島があったとされている所です。この発掘調査によってさらに1m下で平安時代の遺跡が発見され、低湿地の開発が従来考えられていたよりはるかに前から行われていたことが明らかになりました。

この調査結果が新潟平野の開発の歴史や古代史の研究に広く役立てられれば幸いです。

最後に、本調査に多大なる御協力・御援助を賜った横越村教育委員会、発掘調査の計画段階から実施に至るまで、格別の御配慮を賜った建設省北陸地方建設局新潟国道工事事務所・同豊栄出張所に対しまして、ここに深甚なる謝意を表する次第です。

平成6年3月

新潟県教育委員会

教育長 本 間 栄三郎

例 言

1. 本書は新潟県中蒲原郡横越村大字横越字上郷に所在する、上郷遺跡Ⅰの調査報告書である。
2. 発掘調査は一般国道49号横雲バイパス建設に伴い、新潟県教育委員会が建設省から受託して実施したものである。
3. 本遺跡の発掘調査は、新潟県教育委員会（以下県教委と略す）が調査主体となり、昭和63年の分布調査・平成2年の一次調査を経て平成4年7月27日から同年11月20日の期間に実施した。なお、平成4年度の発掘調査は県教委から委託を受けて、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団と略す）が実施した。
4. 遺物の整理、復元作業、報告書作成は埋文事業団職員がこれにあたった。
5. 発掘調査の出土遺物は、一括して新潟県教育委員会が保存・管理している。なお出土遺物の注記記号は上郷遺跡Ⅰを「92上ゴウ」とした。
6. 本書の執筆作業は、赤羽正春が第1章1・2・3、第2章、第3章1（遺構）、第4章、高橋知之が第3章2（遺物）を分担した。なお、本書の編集は赤羽・高橋が行った。
7. 註はそれぞれの頁の下欄に記した。また、引用文献は本文末に記した。
8. 実測図の番号は挿図・巻末図版・写真図版とも共通の通し番号とした。
9. 本書の示す方位はすべて真北である。磁北は真北から西偏約7度である。作成した図版のうち既成の地図を使用したものは、それぞれの図に出典を記した。その他は建設省が測量した地形図を用いた。
10. 発掘調査にあたり、横越村教育委員会・亀田町教育委員会のご協力を賜った。また、建設省新潟国道工事事務所・同豊栄出張所から種々のご配慮を賜った。
11. 本報告書のⅢb層水田跡に関しては、亀田郷土地改良区の更正図を参考にした。また、亀田郷土地改良事務所から種々のご教示を賜った。
12. 発掘調査から本書の作成にいたるまで、下記の方々から貴重なご教示をいただいた。厚く御礼申し上げる。（敬称略）

寒川 旭 酒井和男 中島榮一 宮崎芳春

目 次

第 I 章 序 説

1. 調査に至る経緯……………1
2. 遺跡の位置と環境……………1
3. 上郷遺跡と周辺の遺跡……………2

第 II 章 調査の概要

1. 一次調査……………4
2. 二次調査……………6
3. 整理作業……………11

第 III 章 遺構と遺物

1. 遺 構……………13
2. 遺 物……………21

第 IV 章 総 括

1. III b 層水田跡について……………34
2. 平安時代の遺構・遺物について……………34
3. 遺跡の性格……………35
4. 要 約……………36

C₁₄分析結果……………37

参考・引用文献……………38

図 版 目 次

図 面

- 図版 1 遺構全体図 (1:600)
- 図版 2 遺構実測図 (1:80) 自然流水路 1・2・3・4、SK38、P39
- 図版 3 遺構実測図 (1:80) SE 5、P 6・7・9、SK 8・10・40、SX41
- 図版 4 遺構断面図 (1:20) SE 5、(1:40) P 6・7、SK 8
- 図版 5 遺構実測図 (1:80) SK10・15・16、P 9・11・14、SD12・13
- 図版 6 遺構断面図 (1:40) SK10・15・16、P 9・11・14、SD12・13、SK17
- 図版 7 遺構実測図 (1:80) SK17、SD18・19
- 図版 8 遺構実測図 (1:80) SD18・19・20・21
- 図版 9 遺構断面図 (1:40) SD18・19・20・21・22・24、SK23
- 図版 10 遺構実測図 (1:80) SD21・22・37・38
- 図版 11 遺構実測図 (1:80) SD18・19・20・24・SK23
- 図版 12 遺構実測図 (1:80) SX25、SD26・27・28・29
- 図版 13 遺構断面図 (1:40) SX25、SD26・27・28・29・31、SK30・41、P32・33・34
- 図版 14 遺構実測図 (1:80) SB35、SD31、SK30・36・37・41
- 図版 15 遺構断面図 (1:40) SB35、SK36・37
- 図版 16 遺物実測図 (須恵器 1)
- 図版 17 遺物実測図 (須恵器 2)
- 図版 18 遺物実測図 (土師器 1)
- 図版 19 遺物実測図 (土師器 2)
- 図版 20 遺物実測図 (土師器 3)
- 図版 21 遺物実測図 (土師器 4)
- 図版 22 遺物実測図 (土師器 5)
- 図版 23 遺物実測図 (土師器 6)
- 図版 24 遺物実測図 (土師器 7・石製品)

写 真

図版25 上郷遺跡1 航空写真

図版26 1.基本層序 2.水田跡完掘 3.調査区近景

図版27 1・2・3 調査区近景

図版28 掘立柱建物跡 (SB35) 柱穴土層断面

図版29 SE 5・17土層断面

図版30 自然流水路 1・2・3・4 SD12・13・18・19土層断面及び完掘状況

図版31 SD19・20・21・22・24・26・27・28・29・31土層断面

図版32 SK10・15・16・23・30・36・38土層断面

図版33 P 6・7・9・11・14・32・33・34・37, SK 8土層断面

図版34 SX25・40、湛水池

図版35 遺物 (須志器1・内黒の土師器)

図版36 遺物 (須志器2)

図版37 遺物 (土師器1)

図版38 遺物 (土師器2)

図版39 遺物 (土師器3)

図版40 遺物 (土師器・須志器製作技法、石製品)

挿 図 目 次

第1図	上郷遺跡周辺の遺跡	3
第2図	一次調査試掘坑位置	4
第3図	上郷遺跡グリッド設定図	7
第4図	上郷遺跡土層柱状図	8

表 目 次

第1表	周辺の遺跡と立地	3
第2表	土器観察表	30・31・32・33

第 I 章 序 説

1. 調査に至る経緯

一般国道49号横雲バイパスに係る横越地区の遺跡分布調査は、昭和63年から本格的に行い、平成2年度の一次調査を経て、平成4年7月27日から11月20日まで、上郷遺跡Ⅰの発掘調査を実施した。

遺跡の発見は、昭和60年新潟県教育委員会が行った遺跡詳細分布調査で土師器・須恵器のみ見つかったことが契機となっている。この時、遺跡として登録、周知化された。

昭和63年の分布調査は、横雲バイパス法線内を中心に行い、遺物の分布状況から上郷遺跡をA・Bの二つに分けた。Aは西側新潟寄りである。

この結果を受け、平成2年10月22日から26日まで上郷A・B遺跡の一次調査が行われ水田跡・土坑などの遺構と土師器・須恵器の遺物が検出された。C₁₄測定の結果も、水田跡が中世との結果を得た。教文第1204号で、平成2年11月15日建設省北陸地方建設局新潟国道工事事務所長宛に、バイパス建設にあたっては発掘調査が必要である旨の通知が行われた。

上郷A・B遺跡の発掘調査は、平成4年から6年の3年間にわたって行われることとなり、阿賀野川寄りの上郷B遺跡から新潟寄りのA遺跡に向かって実施することになった。平成4年はB遺跡を中心に発掘調査を実施した。

なお、発掘調査の結果、A・Bは同一遺跡であることが判明したため、本報告書では平成4年度の調査報告をⅠとして刊行する。したがって5年度以降をⅡとする。

2. 遺跡の位置と環境

上郷遺跡は阿賀野川の左岸、横越村沢海と横越本村に挟まれた水田部にある。地籍は横越村横越字上郷402番地ほかである。昭和27年の土地改良までは、西側の川根谷内地区に続く低湿の水田部よりも僅かに高く、桑畑となっていたという。海拔4.5mで横越本村や木津の5mに次ぐ、沖積平野の微高地にある。

享保16(1731)年、砂丘列内側に蓄まる加治川の悪水を吐くために松ヶ崎放水路を開削する。ここが融雪時の増水で本流と化すまで、阿賀野川と信濃川は共通の河口に併呑され海に落ちていた。正保2(1645)年越後国絵図(新発田市立図書館蔵)を見ると、巨大な鳥屋野潟が信濃川と阿賀野川の間に入り、阿賀野川右岸に福島潟が記されている。各集落は、砂丘列と自然堤防の微高地に立地していたことが分かる。また、口伝と図面から江戸時代に横越島があったと

されているが、上郷遺跡はちょうどこの島の縁の部分にあたる。一方、豊栄市平林に残されたかつての阿賀野川の流れた跡、「古阿賀」から推測すると、阿賀野川の蛇行は上郷と木津の間を抜けて川根谷内に向かい、ここで反転して平林に向かっていた時期があったようである。明治44年測図、国土地理院の地図でみても京ヶ瀬村関屋から西に向かって流れ、沢海と横越の間を抜けた後、川根谷内と亀田の砂丘に挟まれた所で東に転じて行く流れと、そのまま亀田の早通を抜けて鳥屋野潟へ入る流れのあったことが推測される。

上郷遺跡で人々の生活が営まれていた平安時代は、いたるところに小運河が巡り、広大な低湿地が広がっていたようである。

3. 上郷遺跡と周辺の遺跡

海岸線と平行に13列ある海岸砂丘の最も内陸にある亀田横越の砂丘上に存在する遺跡は縄文時代からその痕跡を見ることができる。縄文時代前期の海進は日本海側で約5m、海水面の上昇をみたとされているが、この砂丘上でも海拔5m前後のところに縄文時代中期から晩期にかけての遺跡がある。分布は海側でなく内陸側に偏る傾向がある。一方、阿賀野川が作ったとされる自然堤防上の海拔5mを越えるところにも、上田遺跡（横越村）があり中期から晩期にかけて砂丘上からより低い面へとその痕跡が移っている。

弥生時代の遺跡では、内陸南側新津丘陵に八幡山遺跡〔川上1988〕がある。ここでは高地性集落が検出された。砂丘上の笹山前・前郷・山ノ家などの遺跡も、縄文時代に引き続いて存在している。一方、同じ沖積平野にある阿賀野川右岸京ヶ瀬村猫山遺跡は海拔6mの自然堤防上に位置する。昭和33年新潟市の上原甲子郎氏が発掘した。現在、遺物は沢海の北方文化博物館に所蔵されている。弥生時代の再葬墓といわれる〔京ヶ瀬村教育委員会1967〕。

奈良・平安時代の遺跡は沖積地、現在の水田面の下（海拔5m以下）の所にも多く存在している。かつての自然堤防上であろう。横越村に小杉・山のハサバ・江尻・上田・宮尻郷・川根谷内・木津そして上郷とあり、京ヶ瀬村に曾根・寺屋敷・太田などがある。水稲耕作の広がりと共に、低湿地の開発が進んだものようである。新潟の沖積地の開発は、近世の後半に全盛を迎えることになるが、その拠点となったのはこの時代の開発村であったようである。一方、古代の生産遺跡もこのころから増大し始める。新津丘陵七本松窯跡群〔中川1956〕は昭和29年中川成夫氏によって調査された須臾器の窯跡である。この丘陵では、新潟県で8世紀以降に盛んになってくる製鉄の窯跡が集中して発掘されている。関雅之・本間信昭氏による、北蒲原郡豊浦町の真木山製鉄遺跡の発掘以来、中・北蒲原郡丘陵地帯の製鉄遺跡は炭窯の伴出によって生産構造も明らかになりつつある〔関・本間1981〕。

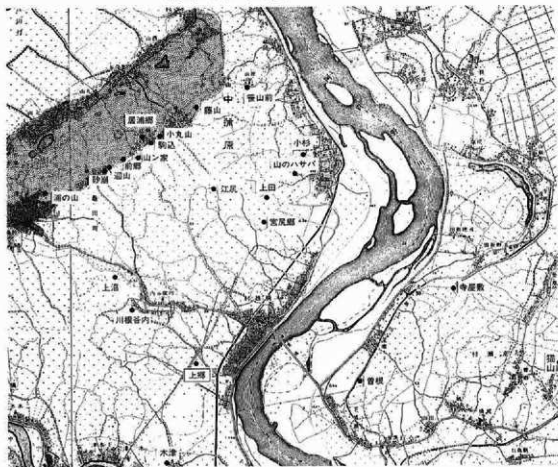
この地域の沖積地にある水田跡と思われる遺構の発掘は、平成4年に細池・寺道上遺跡で行われた。プラントオパールなどの分析を待たなければならない面が多くあるが、水田開発の姿

が少しずつ明らかとなっていくものと思われる。上郷遺跡の南隣にある木津の平安時代の姿や、西隣の川根谷内遺跡のそれも出土遺物などから判断する限り水田を控えた場所であったことが推測されており、今後の調査によって低湿地開発の姿がみえてくるものと考えられる。

	砂 丘 (丘 陵)			自 然 堤 防		
	縄 文	弥 生	奈良・平安	縄 文	弥 生	奈良・平安
横	笹山前(後)	→	→	上田(晩)		
	小丸山(中)					小杉
	前郷(晩)	→	→			山のハサバ
越		山ン家				江尻
			藤山			上田
			居浦郷			宮尻郷
亀			駒込 等			上沼 等
	迎山(中・晩)					
	砂崩(中)					三王山
近在		新津市八幡山	七本松窟跡群等		京ヶ瀬村猫山	曾根・寺屋敷等

第1表 周辺の遺跡と立地

スクリーントーン：砂丘



第1図 上郷遺跡 周辺の遺跡

〔国土地理院発行明治44年〕

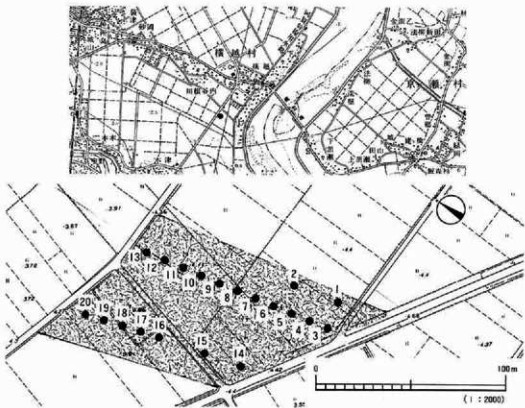
第II章 調査の概要

1. 一次調査

上郷B遺跡の一次調査は「第I章、1. 調査に至る経緯」でも述べたように、平成2年10月22日から26日まで行われた。バックフォー（0.7㎡級）2台で、2.5m幅の試掘坑を法線に沿って、東側と西側に2本続けて入れ、適宜、深掘りして土層を観察した。下図の1から20はその場所である。確認率は10%であった。

一次調査の結果、遺物が検出されたのは5、6、7、14である。耕作土の下、約65cmから110cmの平安時代と思われる層から、杯や甕の一部が検出された。破片の割れ口も角張っており、流れ込みと判断できないことから、遺構に伴うものと考えられた。遺構は溝状のものか検出された。

水田跡は7から13にかけて、稲株と共に検出されている。土師器・須恵器の伴う層より二枚上のⅢb層となっており、遺物による時代の確定はできなかった。



第2図 一次調査 試掘坑位置 (上図：国土地理院発行「新編」1:50,000原図)

土層の堆積状況は、擾乱を受けた跡もなく自然堆積を繰り返した良好な姿で観察された。特に、長時間の湛水からきたと思われる沈澱によって積もり重なってきたと考えられる、砂・シルト・粘土の順に観察されるものが多かった。層序は次の通りである。

(※確認調査の時は a、b、c に分けることはしなかった)

	表土	……………水田耕作の黒色土	10～15cm
I 層	: 暗灰褐色粘土 酸化鉄を含む	→水田還元層	5～15cm
II 層	: 暗黄色粘土		5～13cm
III a 層	: 暗赤褐色土		15～17cm
b	: 黒色土 (試掘坑 7～13で検出)		(2～5cm)
IV a 層	: 暗褐色土		20～25cm
b	: 赤褐色シルト		
c	: 青灰色砂質土		
V a 層	: 黒色シルト	→平安時代遺物包含層	15～20cm
b	: 暗灰色粘土	→平安時代遺物包含層	
VI 層	: 青灰色シルト	基盤層	

〔※水田跡と思われるものが検出された IV c 層、V a 層の年代測定を行うため、ここから出土した炭化物を学術院大学木越研究室に送付し、測定を依頼する。このうち、畔直下の竹は V a 層のものであり、畔上の草は IV c 層である。巻末に報告書を転載する。〕

この測定結果から、中世の層が IV 層を中心に堆積していると判断された。この間に遺物は無い。したがって、V a、V b 層は平安時代の中期にあたる土層と判断される。V b 層は V a 層の下にはりつくようになり、2 cm から 5 cm の層に土師器・須恵器が堆積していた。この状況は長い時間にわたって住み続けたところではなく、平安時代中頃の一時期、水位が比較的安定した時代があり、生活を営むのに適する環境となっていたものであろう。

一次調査の際に上郷遺跡の遺物出土状況が南に偏っていることについて、土層柱状図を検討した結果、次のように結論づけた。遺跡が微高地にあたる所は遺物がより多く検出される。しかし大きな溝や沼の場合はほとんど検出できない。事実 V b 層の比高は大きいところで約 50 cm あり、高い所で遺物の検出をみて、低いほうは V 層そのものが一つとなってしまうている。試掘坑 8 と 15 を結ぶ線から北側は大きな沼地になっていると考えられる。

発掘調査には、III b 層の水田跡を先に調査し、その後、下の平安層までおとして調査することが決められた。

低湿地・沖積平野の水田跡などの生産遺跡は従来、新潟県では発掘例が少なく、貴重なデータが得られるものと期待された。

2. 二次調査

A. グリッドの設定 (第3図)

上郷遺跡周辺の3級基準点、木津・石井・小池畠から座標をおこした。上郷遺跡南東隅のX軸・Y軸は、第6系の基準点からそれぞれ204,740m・56,940mを基準とした。この点を基準に北側に10m、西側にも10mで区画していく。10m×10mに区画された範囲を大グリッドとした。範囲を示す標示は、基点から真北に数字で1～14・真西にアルファベットでA～Kとし、3F、9Gなどと表記した。

大グリッドの南東端の杭を基準に、ここから2mおきに北側・西側を区画すると、各辺5区画ずつ25区画となる。これを小グリッドとし、基準の杭から西に向かって1～5、二列目は6～10と数え、全部で25までを区画した。遺跡の位置を示したり、遺物をあげる際は、小グリッドまで記述し、8F-24などと記録した。

実際の調査対象となった範囲は、東西A～J、南北1～13の法線内である。

B. 基本層序 (第4図)

本遺跡の層序は各実測地点でほぼ共通している。

上から水田耕作土：約10～15cm。

I層：暗灰褐色粘土に酸化鉄を含む層、5～15cmで水田耕作の基盤層。

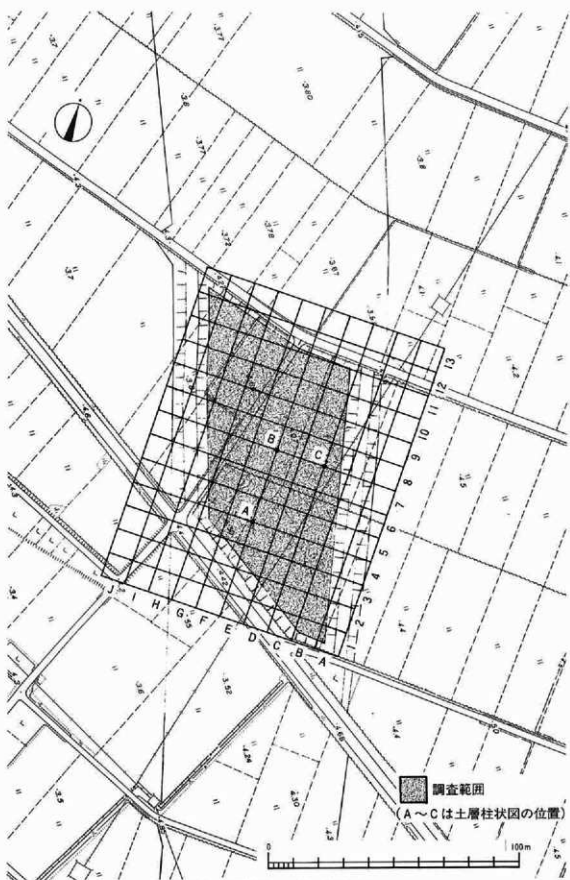
II層：暗黄色粘土。

III層：aとbに分かれる。IIIbは水田跡の層である。この土層が検出された範囲は3C、4B・C・D・E、5B・C・D・E、6B・C・D、7C・D、8C・D、9C、10Cのグリッドの範囲内である。この水田跡の圃りにはハサ木の根が畦に平行して巡っていた。水田部の堆積土は黒色で稲株の間に砂の堆積層が検出されている。

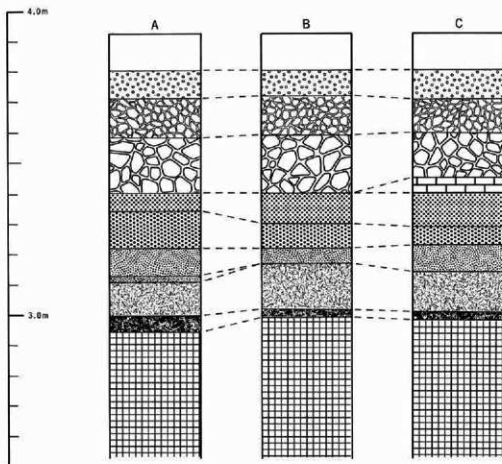
IV層：a、b、c、c'に分かれる。それぞれ厚さは6～15cm、5～14cm、5～10cm、4cmで中世の堆積層である。c'は暗い色調の青灰色粘土で、遺跡の低い部分から出ていることから洪水による堆積かと思われる。aは黒色に近く、遺物が含まれていてもおかしくないが、現実には検出されなかった。













V層：a、bに分かれる。平安時代の遺物包含層である。遺構はVaの底面まで下げれば検出されるものとVI層上面まで下げないと検出されないものがあることから、Vbが最初の生活面であった可能性が高い。

VI層：青灰色粘土の基盤層である。この層より下、約20cmには黒色の植物腐食堆積層がある。この下には、青灰色粘土の層があり、交互に堆積した状態が観察できる。



第3図 上郷遺跡 グリッド設定図



- | | | | |
|--|-------------------|--|---------|
|  | 耕作土 |  | 暗青灰色砂質土 |
| I  | 暗灰褐色粘土に褐鉄鉱の朱を含む | c'  | 暗青灰色粘土 |
| II  | 暗黄色粘土 | V a  | 黒色シルト |
| III a  | 暗赤褐色土 | V b  | 暗灰色粘土 |
| III b  | 黒色土 (水田跡) 近代遺物包含層 | } 平安時代遺物包含層 | |
| IV a  | 暗褐色土 | | |
| IV b  | 明赤褐色シルト | VI  | 青灰色基盤層 |

第4図 上郷遺跡 土層柱状図

C. 調査方法

調査は一次調査の結果をもとにⅢb層から実施した。調査手順は1Aグリッドから北に向かって進めることとし、Ⅲa層中間までを重機により除去した。低湿地のため排水には特に留意し、調査区の周囲に幅2m、深さ1mの土側溝を設けた。水は土側溝南東隅の集水溝に集め、ポンプにより排水した。さらに調査区内に適宜排水溝を入れた。

水田面と同じ高さで細の面が検出されたことからここを精査し、実測してからⅢb層の水田面の発掘にかかった。当時の稲株が切り取られた状態で検出された。株の間の面には2～3cmの厚さにうすく砂が堆積しており、ここまでを移植ごてで手掘りした。稲株は空気に触れると瘦せて縮んでしまうため、検出すると同時に良好な状態を保持しているものを写真に撮り、記録していった。

この面の調査が終了した後、約40～50cm下にある平安時代の遺物包含層の調査にかかった。再度重機を入れ、Ⅳc層までさげた。この後、手掘りでⅤa層を掘り進め、精査・遺構確認と進めた。人力で除去した遺物包含層の上面には殆ど遺物がなく、下半分・基盤層にはりつく位置(基盤層直上面)に遺物が集中した。遺構もⅤa層の中間から底面あたりで確認されている。

出土遺物はすべて小グリッド・出土層を記入して取り上げ、遺構内の遺物は遺構名と小グリッド・層位を併記した。

遺構の断面図をとり、平板で平面実測を行った。

D. 調査の経過

7月22日…建設省職員の立ち会いのもと、発掘調査範囲の確認をする。重機で発掘面まで掘り下げた。22日～24日までは発掘調査準備期間とし、プレハブ2棟建設、発掘器材の搬入、環境整備、関係者への挨拶まわりを行う。この期間中、重機で表土剥ぎを実施。

7月27日…作業員を集めて、説明会を実施。総務課長挨拶。28日からジョレンカけを開始する。31日水田跡のプランを確認し、周りのハサ木列の根を検出する。

8月3日～7日…水田跡を掘る際の深さを確認するためトレンチを空ける。ベルトコンベア一の幹線を延ばし、排土場所の設定・整備をする。

8月17日～9月11日…水田跡の発掘。掘りあがったところから、平面実測・レベル実測。

9月14日～9月30日…9月30日水田跡の発掘完了。この間、平安時代の遺物包含層の深さを確認するため、水田跡以外の場所で10本のトレンチを入れる。それぞれの位置は次のとおりである。2C・1～5、4E・1～5、5G・1～5、6F・1～5、7F1～5、10F・1～5、11F・1～5、11G・1～5、12H・1～5、8D・1～5。すべてのトレンチから土師器・須恵器が出土した。特に多量に出土したのが4E・5G・11F・11Gである。土器の集中区は、

南と北に分かれてほぼ同じ高さで検出された。トレンチからは平安時代の遺物が比較的多いため、調査の期限や方法について、調査課長の判断を仰ぐ。この結果、作業員を増員して本年度中に終わらせることになり、作業員を増員した。これに伴いプレハブ1棟増築。

9月22日から重機を使ってV a層直前まで土を掘り下げる。水田跡の実測と写真撮影のため、水田跡が検出されなかった4～10-F～Jの部分、西側半分から作業を行う。そして水田跡の発掘が終わった作業員を入れる。

10月1日～10月20日…水田面の実測終了後、重機でV a層の直前までさげる。この間先にV a層が出ていた3～5-F～Hから包含層掘削を行い、遺構確認・遺構掘り・実測という順序で進む。4～8-F・G、11・12-G～Iの二ヶ所に遺物・遺構が集中しているため、ここを中心に作業員を入れる。10月8日、11Hで柱穴列らしきものが検出される。10月13日から4・5-E・Fの遺物あげ。この下の遺構発掘にかかる。

10月21日～10月30日…8・9・10-D・Eで並行に走る溝を数本検出し、ここを発掘する。遺構の検出されていない部分は基盤層まで出して止める。平安時代の遺構面の平面実測を始める。

11月4日～11月19日…遺構を実測し、遺物あげを行う。全体図、遺構写真・航空写真撮影を実施。

11月19日…発掘調査完了

11月20日…撤収

E. 調査体制（本調査）

調査主体	新潟県教育委員会	（教育長 本間栄三郎）
調 査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団	（理事長 本間栄三郎）
管 理	藍原 直木	（事務局長）
	波辺 耕吉	（総務課長）
	茂田井信彦	（調査課長）
調査担当	藤巻 正信	（調査課 第2係長）
調 査 員	赤羽 正春	（ " 主任）
	木村 孝一	（ " 嘱託）
	和泉 誠一	（ " 嘱託）
	遠藤慎之介	（ " 水原町研修生）
庶 務	藤田 守彦	（総務課主事）
調査作業員	横越村、亀田町、新津市、京ヶ瀬村の方々	

3. 整理作業

A. 整理の方法

出土遺物は木器1点を除いて、土師器・須恵器が主体を占めた。土師器と須恵器の割合は、圧倒的に土師器が多く、器種別では杯・甕・鍋の順であった。出土した土師器は、遺物あげの時点で小グリッドごと・遺構ごとになっているものを単位として水洗いした。土師器の水洗いは毛が最も柔らかいブラシを使用し、糸切り跡やロクロナデなどがこすって消えないように、押し土を取る方法を探った。土師器は水洗い後、乾燥が不十分になりやすい。かびから遺物を守るため約2日間乾燥させてから注記した。注記には墨汁を用い、文字の上からニスを塗って文字をカバーした。

注記が終了した土師器は土師器と須恵器に分類し、遺構・小グリッドごとにまとめた。接合は、遺構ごと・小グリッドごとにまとめたものの中で行い、完全に接合できないものは近隣の小グリッドの中から捜し出した。石膏復元は、出来るものすべてについて行うことができる程度の遺物量であったため、これを実施した。鍋のように大きなものは、口縁部分の破片をつないで、円周と胴体部分の傾きで図上復元できるまで接合した。内黒土師器は出土している数が極めて少ないため、極力復元に努めた。須恵器も数が少なく、須恵甕など大グリッドを越えて、破片を捜し出した。特に、自然流水路から検出されたものはその流域の遺構から接合できるものがあつた。横断も1点のみの復元のため、大グリッドを越えて探し出した。最も多く復元された土師器の杯は、ロクロナデ等の製造技術を観察するためにかなり細かな破片までも探し出している。

遺物の実測は、遺構から出土したものを優先的に進め、ここの遺物で報告書に載せたほうがよいものを選びながら行った。遺構外では、良好に復元されたもののうち、出土量の多いものを出来る限り実測し、写真撮影を行った。

遺構実測図は、平面図・断面図ともに1/20で実測してきたものを1/40の第2原因に写し、番号を付して図面台帳を作成した。遺構実測図は、遺構の多くが溝であるため、個々に取り上げることとはせず、グリッドを中心とした平面図に、できるかぎり良好な状態で遺構が入るように努めた。

トレースの段階で特に注意したのは井戸のセクション図である。土層堆積が混んでいるため、間隔が狭くトレースの線が潰れてしまう。縮尺率を工夫して解決を図った。

B. 整理の経過と体制

出土遺物の水洗いは、発掘作業の現場で実施し、乾燥させたのち袋詰めにして埋文事業団本部へ搬入した。ここで注記・接合・実測と一連の整理作業を行った。

報告書の作成を次年度までに完成させるため、発掘調査後の遺物台帳・遺構台帳・図面台帳の整理等、基本的な事を行った後すぐに作業にかかることとした。したがって、遺構カードは現場で作成したものの利用に止め、新しく内容を書き加えることはしなかった。

11月24日～12月26日…注記と遺物接合を優先的に実施。作業員2名で注記を行う。復元できる土器もここで注記した。この間、調査員は図面整理を行い、遺構全体図を作成し製図を行う。

平成5年1月4日～3月19日…遺物の実測を実施。須恵器と土師器に分け、それぞれ1名の職員と作業員がはりついて行う。2月22日からは実測した図面の中から、トレースして報告書に載せるものの図版作成。遺構図版も、この間に全体図・部分図の製図を終了した。

3月22日～4月10日…遺構の写真図版を作成。遺物の項目を除いて総ての図版を終了させた。原稿も遺物を除いて、下書き終了。

4月12日から、平成5年度の上郷遺跡の発掘調査に着手した。昨年、発掘調査を実施したⅠ地区の北側である。このため整理作業を中断する。11月12日Ⅱ地区の発掘調査終了。Ⅱ地区の基礎整理終了後、上郷遺跡Ⅰのまとめに入ったのは11月24日であった。遺物についてはⅡ地区の調査員・高橋知之がⅠ地区の遺物を担当する事となり、整理作業に加わった。昨年、作成しておいた原稿の下書きをワープロに打ち、図版を組み入れ、編集した。

整理作業の体制はつぎのとおりである。

管理・指導	茂田井信彦	(総括)
担 当	藤巻 正信	(須恵器の復元・実測)
職 員	赤羽 正春	(遺構実測図・土師器の整理・実測・復元・編集)
職 員	高橋 知之	(遺物実測図・編集)
職 員	遠藤慎之介	(土師器の整理・観察表作成)
職 員	和泉 誠一	(遺構写真・図版作成)
作 業 員	(注記・接合・遺構実測図製図・遺物復元・実測)	

第III章 遺構と遺物

今回の調査で検出された平安時代の遺構には、掘立柱建物跡1棟、土坑7基、溝17条、井戸1基、ピット19基がある。遺物はバンケース（59×38×19cm）で約12箱であった。III b層の水田跡については、第IV章総括で取り上げ、ここでは平安時代の遺構と遺物について説明する。

遺構のうち、主体を占める溝は自然流水路のほか、排水機能以外の目的で掘られたものが9条ある。建物跡は、中央に多量の炭や土師器の出土した土坑を持つ特異なものである。このほかに、浅い整穴状の不明土坑が1基検出されている。

遺物は土師器・須恵器が主体である。出土土器の種類別の比率はおおよそ7：2で土師器が圧倒的に多かった。このことの分析については第IV章総括で述べる。出土遺物はその殆どが平安時代中期に属している。木器は角材が1点だけ出土している。

1. 遺 構

掘立柱建物跡 SB35 (図版14・15・28)

遺跡の北端12Hグリッドにある。2間×3間（4.2×4.5m）の大きさである。中央にSK36があり、この周りに10本の柱穴の検出をみた。南端を①とすると、①～③はN-50°-Eを指し、③～⑥の柱穴列が直交する。ピットそれぞれの寸法を記す。

①34cm (長径)×24cm (短径)×41cm (深さ)	②40×34×22
③42×41×19	④40×36×29
⑤55×40×20	⑦39×39×20
⑥61×49×18	⑧44×42×18
	⑩36×30×12

これらのピットはどれも垂直に掘られており、円筒形を呈する。⑩は浅いかはは20cm前後である。

ピットの中で土器が検出されたのは、①、④、⑤でいずれも覆土下層から出土した。①と⑤は下層の土の中からであるが、④ではピットの底に刺さるような形で、須恵器片が出土した。

中央部にあるSK36は、土師器の杯が3枚完形に近い形で、重なって検出された。今池編年VIに相当する。覆土の最下層は黒色土に炭を含む層、この上に焼土と炭の層がのる。ここからも多量の土師器片が出土した。表面に出ている上層は、青灰色シルトに多量の炭を含む層であった。

掘立柱建物の中にこのような跡があることは考えにくい。しかし、建物の柱穴の検出面と同じレベルで出ていること、柱穴で囲まれた部分のみ完形に近い土師器や須恵器が大量に分布したことから建物跡との関連を推測している。

柱穴の間隔は、長軸側が2 m、短軸側が1.4 mと不揃いである。しかし③～⑥の列の延長線上を南東に向かっていくとピット32～34につながる。

井戸

SE 5 (図版3・4・29)

SE 5は3 E-1グリッドにある。平面円形で、180 cm (長径)×170 cm (短径)である。最深度まで87 cmを測る。円筒形の底部は円弧状にへこんでいる。長軸はE-35°-Nを示す。

井戸から水を取り出したらしく、南側に溝が作られ、水を流し出すような施設を伴っている。この溝の底面から、井戸の底までは79 cmある。溝は井戸から離れるほど深く掘ってあった。

7・11・13層は腐植土を多く含む層である。草などの有機物が含まれる。また、8層と7層が9・10・12・13層の堆積を分断している。9・10・12・13層は暗灰褐色シルトより黒く粘土質に近い。

13層より下の層は、自然堆積状態を示す断面が観察される。

7層より上の層では、4層で多量の炭の出土があった。遺物として焼かれた石の出土例が多いが、ここではなかった。

溝状遺構

SD12 (図版5・6・30)

4 F-1～7グリッドにかけて位置する。全長2.4 m×最大幅42 cm、長軸の方向がN-28°-Wである。深さは17～18 cmで、南側はピット11と切り合っている。SD12の方が古い。土層断面は、大きく2層に分かれ、上層に黒褐色シルト質粘土があり、下は上層より黒っぽい粘土である。遺物は上層から土師器片の出土があった。

SD13 (図版5・6・30)

4 F-2～14グリッドにかけて位置する。全長4.9 m×最大幅52 cm。長軸の方向がN-33°-Wである。深さは11 cm～14 cm。SD12と平行に走る。排水のための溝ではない。土層断面は上下2層に分かれ、上層に黒褐色土、下層に炭を多量に含む黒色土がある。上層からは土師器片が多数出土している。

SD18 (図版7・9・30)

8・9 Cの大グリッドの中であり、8 C-1から9 C-25にかけて大グリッドの対角線に位置する。全長22 m×最大幅2 m。この溝状遺構の中央部で、東側遺跡範囲外から来る深い溝とつながり南と北側に分かれる。南側の溝は先端に行くほど深く、最深度は12.5 cmを測る。一方、中央部の高いところに比べて、北側も先端に行くほど深く、13 cmの掘り込みとなる。中央部に溝から両先端に向かって、水が流れやすい構造になっているが、水を排出する機能はない。南側はN-16°-W、北側はN-30°-Wの方向を指す。この溝の底面から、一段深く、(7～10 cm)

掘られた溝がある。これら北端部・中央部の掘り込みは、その最下層に厚さ約4cmほどの炭の層があり、この層の上に、土師器が大量に入り込んでいた。暗灰色粘土層の下である。

SD19 (図版7・9・11・30)

7・8・9-Cの大グリッドを横切るように位置する。全長24m×最大幅2.1m。この溝状遺構はSD18と平行しており、北側内部に深い掘り込み部分が入るのも共通している。深いところで30cmの掘り込みがある。全長7.2m×最大幅0.5mを測る。SD18と同様、この掘り込みからも大量の土師器片・須恵器片(図版19(48・53・63))が出土した。土層の堆積状態は、3層に分層される。上から、灰白色粘土に炭を含む層・灰白色シルト・黒色腐植土に大量の炭を含む層となっている。この溝はN-28°-Wの方向を指す。一方、南側は深い掘り込みをもたず、N-10°-Wの方向にはしる。堆積状態は中央部で2層。暗青灰色粘土に少量の炭を含む層の下に青灰色粘土がはいる。南端は、中央部の下層と同じ土が単層で入る。SE17の近くに掘られており、SD18とも独立している。

SD20 (図版8・9・11・31)

8C-15・20、8D-16・21、9D-1・2にかけて位置する。確認調査のトレンチが北半分にかかり、攪乱を受けているため、9D-2~23に向けての半分が検出不能であった。発掘できた部分は、全長6.4m×最大幅1.6mである。この溝状遺構もSD18・SD19と平行しており、N-25°-Wを指す。深さは地表面から4cmほど掘り、この面からさらに5~8cm掘り込んだ深い溝が中に入る。深い溝は、南から4.4mの所まで発掘できた。土層から判断する限り、深く掘り込んだ後に埋まってきた溝を、再び中央部のみ掘り下げて再利用した事が分かる。掘り形は円弧形である。土師器・須恵器片は1層や4層で大量に出土している(図版19(52・55・57))。SD20の西側の4本の溝もSE17の北側に位置している。

SD21 (図版8・10・31)

8・9Dの大グリッドの対角線の位置にある。SD22と浅い掘り込みでつながる。全長19m、最大幅2m。地表面から5~10cm掘り、さらにこの面から5~8cmの掘り込みが中央に入っている。この溝は全長13.2m×最大幅65cm。35cm幅を平均とする。N-22°-Wを指す。土層は円弧状に3層が堆積する。上から黒色土、黒色土に黄褐色土を含む層、そして下層に暗青灰色シルトと黒色腐植土の層が入る。土師器片が各層から出土している。

SD22 (図版9・10・31)

8・9Dの大グリッドに斜めに入る。SD21の西側に位置する。全長11m、最大幅1.5m。確認面から9~12cmの掘り込みがある。N-20°-Wを指し、北側でSD21と合流する。この場所だけ4~6cm掘り下げている。土師器片が多量に出土した南側の部分は、円弧状の掘り形に対し、複雑な堆積状態を示す土層が見られる。

SD24 (図版11・31)

10C・D、11C・Dにまたがって位置する。遺跡北東端にある。検出された部分が全長4.6m、

最大幅2.2mで切れており、東側調査範囲外に延びる。この溝は真西を指している。掘り込みは浅く、東側で5cm、西側で1～3cmと、東側が深い構造になっている。SK23の近くにあるが、関連は不明である。暗青灰色粘土に褐鉄鉱の朱と黒褐色の腐植土を含む層が堆積している。

SD26 (図版12・13・31)

11F・10G・11Gの大グリッドを西に貫き湛水池に達する溝状遺構である。排水のために掘られたものと思われる。全長23m、最大幅1.5m、80cmが平均的な幅である。W-32'-Sを指し、西へ行くほど南側に湾曲している。この溝状遺構は、北側の小さな溝や住居跡と思われる遺構集中区と、SX25周辺の遺物集中区の間を区切るもので、水位は西側が低くなるように作られている。掘り込みは東側で15cm、西側で22cm、中央部で26cmある。この中央部分が幅も広く、比較的深くなっている。6層のうち、2層と5層に多くの腐植土を含む。特に5層は黒色腐植土が固まって堆積し、ここには須恵器・土師器片が大量に含まれていた。土器片の出土の最も多かったのは、この深く切り込まれた溝の部分で、全長6.1m×最大幅58cmの大きさである。SD27・28・29の合流部に当たる。

SD27 (図版12・13・31)

11G-9・14・15、11H-11とつながる所に位置する。SD28・29と平行にはしる。SD26とつながっている。全長5.5m、最大幅75cm、W-35'-Nを指す。掘り込みは4～5cm、上下2層に分離される。上が黒色土に炭を含む層、この下に青灰色粘土に酸化鉄と炭を含む層がある。遺物はどちらの層からも土師器片が数点出ている。

SD28 (図版12・13・31)

11G-13・14・19に位置する。SD27と平行にある。全長3.8m、最大幅65cm、W-36'-Nを指す。掘り込みは4～5cm。土層はSD27と同じで上下2層に分かれる。土器は数点出土している。

SD29 (図版12・13・31)

11G-13・14・15とつながるところに位置する。SD28と平行である。全長4.6m、最大幅2.1m。東側のくびれた部分が幅40cmと細くなり、西側が広がっている。W-38'-Nを指す。掘り込みは3～5cmと浅い。土層はSD27と同じである。土師器片が多く検出されたのは、西側の袋状となった、上層部分からである。SD27・28・29の3条の溝がSD26と合流する地点では、土師器片が集中している。

SD31 (図版13・14・31)

12G-5から11G-25を経て11H-21・16・17・13にかけて位置する。SD26と同方向に走り、SD26-29とは直交する位置にある。検出された部分だけで全長12.5m、最大幅1.9m。北側の最もくびれたところの幅は38cmである。大グリッド12Gにかかっている所が、N-14'-Eで北向きである。11HではW-45'-Sを指している。土層堆積状態は2層である。褐色から黒色に近いシルトの下に黄褐色シルト・青灰色粘土が入る。土器の出土は下層に集中した。

SD37・38 (図版10・27)

8・9-D・Eの大グリッドに2本平行にはしる。SD18-22の西側に位置し、SD37がN-20'-W、SD38がN-18'-Wを指す。SD37全長15m、最大幅0.7m、SD38全長16.7m、最大幅1.2mである。この2条の溝は土器片の出土が少なく、他に比べ掘り込みも浅い。前者が7~8cm、後者が6~7cmである。

SD39・40 (図版1・27)

6・7Eにある。SD20は全長4.9m、最大幅60cm、SD40は全長5.5m、最大幅55cmである。掘り込みは4~7cm、3~9cmあり、土師器片が数点出ている。

土 坑

SK 8 (図版3・4・33)

3F-11にある。平面は長径1.5m×短径0.9mの長楕円形を呈し、長軸方向がW-15'-Nである。覆土は1層で、炭粉を含む黒色土が入る。掘り形は最深部まで7cm。土師器片が上層から出ている。

SK10 (図版3・6・32)

3F-22にある。平面の口径は長径1.7m×短径0.9mの隅丸方形を呈し、長軸方向がW-32'-Sである。掘り形は最深部まで52cmで、鍋底形を呈している。覆土は、上から黒褐色粘土、その下が灰褐色粘土。そして底面のすぐ上に黒色の炭層がのっている。この最下層は焼土を含み、土師器の鍋・杯が多量に出土した。灰褐色粘土の層は混入物をほとんど含まない精良なものである。

SK15 (図版5・6・32)

4G-17にある。排水路にかかり、南西側半分がきられている。土層断面から判断する限り、長径1.3m×短径1.2m位であったと予想される。覆土は2層に分かれ、上が灰白色粘土、下が暗灰色粘土である。遺物はない。

SK18 (図版5・6・32)

4G-22にある。これも排水路にかかり南西側半分がきられている。土層断面から判断する限り、長径約3.5m位と思われる。残っている部分の最大幅は、1.8mである。覆土は3層に分かれている。上から、黒色土に炭を含む層、そして暗灰褐色粘土に炭粉を混入する層、最下層に暗灰色粘土に炭を多く含む層が入る。底面にはりついて、土師器・焼石が出土している。

SK17 (図版6・7・29)

SK17は7D-11・12・16・17・21・22グリッドにまたがって位置する。平面楕円形を呈す。550cm(長径)×408cm(短径)である。最深部まで45cm、すり鉢状の形態である。長軸はN-6'-Wである。この遺構の北側には7本の溝状遺構が平行に走っている。底部、自然堆積層の中に直径1mの倒木があった。

掘り形は、円周部分から30~40cm位離して急に落ち込む形をとっている。東側のテラス状になった部分からは、土師器や焼石が出土している。

覆土の堆積は1~6層まで、自然堆積状態で検出されている。このうち黒色腐植土が検出されているのは2・3・6層である。

9層は腐植土を多く含む。

SK23 (図版9・11・32)

10Dにある。平面は4.4m×4.1mでほぼ円形を呈す。掘り込みは浅く、中央最深部でも25cmしかない。灰褐色粘土に炭を含む層の上に、黒色シルトの層が入る。上層からは多くの土師器・須恵器が出土している。

SK30 (図版13・14・32)

11H-6にある。平面は長径1.9m×短径1.2mの変形楕円形である。長軸方向がN-33°-Wである。覆土は2層に分かれ、褐色土に少量の炭を含む層の下に褐色シルトに褐鉄鉱の朱を含む層が入っている。土器は上層でのみ検出されている。

SK36 (図版14・15・32)

12Hにあり、SB35の柱穴に囲まれた部分にある土坑である。平面は楕円形で、長径1.55m×短径0.8m。長軸方向はW-38°-Sを指す。覆土の中から、完形の土師器の杯3枚が重なって西端から出土した。この面が、東側より約5cm深くなるように作ってある。土器は西半分に集中している。覆土は4層に分かれる。上から、青灰色シルトに炭を含む層・炭の層・焼土と炭を含む層・黒色土に炭を含む層の4層に分かれる。遺物が集中していたのは1・4層であった。断面円弧形の掘り形を持つ。

ピット

P 6 (図版3・4・33)

3E-25にある。平面は楕円形で径58cm×42cm。長軸方向はW-11°-Sを指す。覆土は黒褐色に炭を含む土層1層のみである。9cmの深さを測る。

P 7 (図版3・4・33)

3F-16にある。平面は楕円形で径78cm×51cm。長軸方向はW-0°を指す。覆土は2層に分かれ、黒褐色土の下に炭の層が入っている。鍋底形で深さは11cmを測る。

P 9 (図版5・6・33)

3F-22にある。平面は隅丸方形で径65cm×58cm。覆土は1層で黒褐色土。この中に、土師器片を含んでいた。8cmの深さを測る。

P11 (図版5・6・33)

4F-1にある。SD12と切り合う南側にある。平面は円形で、直径80cm。覆土は黒褐色砂質粘土でSD12の1層と重なる。SD12が2層の土層断面をもっていることから、P11はSD

に伴って切られたものであろう。

P14 (図版5・6・33)

4F-3にあり、SD13の西側にある。平面は隅丸方形で、径99cm×58cm。覆土は黒褐色土の下に、灰白色粘土に多量の炭を含む層が入っている。深さは12cmである。

P32 (図版13・14・33)

11H-25にある。平面円形で、径28cm。土層断面は5層に分かれ、上の1層、暗灰褐色土に炭を含む層には、土師器も含む。2・3層は炭を含む。深さは32cmである。

P33 (図版13・14・33)

11H-25にある。平面は円形で、径27cm。覆土は2層に分かれ、深さは14cm。

P34 (図版13・14・33)

11H-25にある。2つのピットと切り合っている。深い方の平面は円形で、径38cm。深さは19cmである。覆土は1の灰色粘土に黄褐色粘土が混じる層と3の暗灰色粘土と褐色土が混じる層が主体である。

自然流水路

1 (図版2・27・30)

1Bに位置する。遺跡の最南端にあり、南側に延びる。全長7m×最大幅0.95m。7～15cmの深さをもつ。覆土は黒褐色土に炭化物を多く含む単層であった。

2 (図版2・27・30)

1Cに位置する。全長6.5m×最大幅0.62m。7～9cmの深さをもつ。

3 (図版2・27・30)

2Bにあり、SD4の溝に合流する。全長4m×最大幅2m。深さは6～9cmある。覆土は2層に分かれ暗灰色粘土に炭の粒子を含む層の下に黒色シルトに炭を含む層が入っている。どちらの層からも、土師器片の出土をみる。

4 (図版2・30)

2-A・B・C・Dにかけてあり、北東から南西に流れる大きな自然流水路に合流する。全長26m×最大幅4.2m。覆土は2層で、黒色粘土層を主体とするが、一部深くなった所に炭の粉の塊が下層で検出された。SD4に区画された1・2-B・Cは多量の土器片が出土したところである。遺構に伴わないため、廃棄されたものの流れ込みとみている。

3E～7Gに向かって流れ、遺跡西側の沼地に流れ込む流水路の中にも、多くの土師器・須恵器片が堆積していた。特にこの流水路に区画された西側微高地の出土は多く、遺構に関係しない土器片が大量に出ている。南側から土砂で流され運ばれてきた形態をとっている。

11・12-F・G・Hは遺構集中区で、土師器片・須恵器片が大量に出ている。ここは遺構が多数検出されている。

性格不明土坑

SX25 (図版12・13・34)

10・11Fにまたがってある。SD26の南側にあり、平面の口径は、長径5.1m×短径4.2m。浅い土坑状を呈する。遺物の出土量が多く、完形に近いものが多い。土層の堆積状態は2層のみで黒色土に炭を含む層の下に青灰色粘土に酸化鉄を含む層がある。掘り込みは浅く12cmを測る。土器は上層から出土している。

2. 遺物

須恵器 (図版16・17・35・36・40)

須恵器は遺物出土数が少ないことから遺構内外の区別を行わず、器種別に記述を行う。須恵器には無台杯・杯蓋・甕・長頸壺・横瓶がある。遺構内出土のものは土坑内出土の無台杯00 (SK10) と自然流水路内の長頸壺2のみである。

〔無台杯〕(図版16-1~14, 35-1~3, 5~14, 40-7)

1の外面は成形による稜が目立たない。底部の切り離しは回転ヘラ切りによって行われているが、通常のものとは逆の左回転である。2は口縁部外周に重ね焼きによる濃色部分が明らかである。ロクロナデによって成形され、外面は稜が明瞭で、底部の切り離しは回転ヘラ切りによって行われているが、これも左回転である。3はロクロナデで、不規則な稜を有する。底部の切り離しは回転ヘラ切りによって行われている。4は口縁部外周に濃色の自然釉が付着する。ロクロナデによる稜を比較的明瞭に残す。底部内面は回転ナデ、外面は回転ヘラ切りの後にナデられている。5はロクロナデによって成形され外面よりも内面の稜が明瞭である。底部切り離しは回転ヘラ切りによって行われており、底部内面の磨耗から転用硯の可能性が高い。6は内外面とも気泡の抜ける小孔を多数持つ。ロクロナデによっているが稜は目立たない。底部の切り離しは回転ヘラ切りで行われており、底部内面は良く擦れていることから、転用硯と考える。7はロクロナデによる成形だが稜はあまり明瞭ではない。底部内面が磨滅して墨痕も良く残り転用硯と考える。口縁部内側から口唇部にかけて一カ所焦げたタールが付着している。灯明皿に使用されたものであろうか。底部の切り離しは回転ヘラ切りで行われている。8はロクロナデによって成形されており、外面の稜はやや明瞭である。底部の切り離しは回転ヘラ切りによっており、切り離し後の仮置き台の痕が平行線状に見える。底部内面は磨滅して円滑になっており、墨痕は無いが転用硯の可能性もある。9は焼き上がりで黒色の噴出斑が認められる。口縁部外周に重ね焼きによる自然釉の濃色部分が明瞭である。ロクロナデ成形により、外面は稜が明瞭である。底部の切り離しは回転ヘラ切りによって行われているが、左回転である。10の焼成は良好であるが、焼き上がりで黒色噴出物を多く持つ。口縁部外周に重ね焼きによる自然釉が見られる。ロクロナデによって成形され、内外面とも比較的稜が明瞭である。底部の切り離しは回転ヘラ切りによって行われている。内面には墨痕が著しく、やや磨滅しており転用硯と見られる。11は焼き上がりで黒色小斑が多く口縁部外周は自然釉が見られる。ロクロナデで成形され底部の切り離しは回転ヘラ切りによって行われている。切り離し後は板等の上に置いたものか、ヘラ切り痕の上に平行条痕が残る。内面はやや擦れて、薄い墨痕が認められ転用硯と思われる。12は器面に気泡の小孔が目立つ。口縁部外周に重ね焼きによる自然釉が見られる。ロクロナデ成形により、殊に外面に稜が著しい。底部の切り離しは回転ヘラ切りによ

て行われている。底部内面は良く磨滅しているように見られ転用碗の可能性はある。13は口縁部外周に重ね焼きによる自然釉が見られる。ロクロナデによって成形され、比較的明瞭な稜を有する。底部の切り離しは回転ヘラ切りによって行われており、内面は擦れて転用碗の可能性はある。14はロクロナデによって成形されており、不規則ともいえる稜を有する。底部の切り離しは回転ヘラ切りによって行われている。

無台杯は口径11.8～12.6cm、器高2.6～3.2cm、底径7.0～8.0cmのもの(1～13)が多く、口径13.6cmとわずかに大型のもの(14)がある。いずれも成形は、口縁部内外面がロクロナデ、底部の切り離しは、回転ヘラ切りで行われている。特に強いロクロナデで外面の稜が著しいもの(2～5、10、12)と、外面の稜が目立たないもの(1、6、7)がある。ロクロの回転方向は右回転のもの(3～14)がほとんどだが、左回転のもの(1、2)がある。胎土は全て精良で、白色細粒を含むことから佐渡小泊産と思われる。焼成はいずれも良好である。これらのうち、底部内面に焼成後に行われた擦り面が施されていることから、転用碗として使用されたもの(5～7、13)が多い。

〔有台杯〕(図版16—15、35—15)

15は上半部を欠失している。焼成は良く、暗灰色を呈する。ロクロナデによって成形され、底部の切り離しは回転ヘラ切りによって行われた後に輪高台を貼り付け、外縁をナデている。高台はポツリと丸みを持ち内傾して外端で接地する。

〔杯蓋〕(図版16—16—19、35—16—19)

成形は全てロクロナデが施されている。16は口縁部周囲に重ね焼きによる自然釉の付着が見られる。つまみは欠失しているが、平坦な頂部は回転ヘラ切りによって行われており、ツマミの貼り付け後にナデ調整されている。体部はロクロナデによって成形され、口唇は内曲し、口縁は結果として丸くなっている。頂部内面は磨滅し、黒色付着物が著しく、転用碗と認められる。17の口縁部外縁には重ね焼きによる自然釉が付着し、輪状の暗灰色部分となっている。また、内外面に火ダスキが認められる。ロクロナデによって成形され、平坦な頂部はツマミ貼り付け後にナデられている。口唇は極端に内側に入り、丸くなっている。つまみは欠失している。内面は良く磨滅しており、また墨痕も鮮やかで、碗に転用されたことが明らかである。18は内外面ともロクロナデによって成形されており、口縁部は丸く口唇端部は鋭く、やや内曲する。輪高台状のつまみは貼り付けの後に周囲をナデツケられ、内面は指ナデによって抉られている。杯蓋頂部内面が磨滅していること及びつまみの端部が磨滅していることからすると皿に転用していたことが推測される。19は口縁部外周に重ね焼きによる自然釉を認める。焼成により歪みがあるが、ロクロナデによって成形され、口唇部は大きく屈曲する。周縁部の微妙な稜を除いては、稜は目立たない。肩部は回転ヘラケズリされ、つまみは欠失している。

16～18は胎土は精良で白色細粒を含む佐渡小泊産と思われる。19は胎土が粗く佐渡小泊産とは思われないが産地は不明である。また、内面が磨滅し、黒色付着物が認められることが

ら、転用祝と考えられるものが多い(16-18)。

〔長頸壺〕(図版16-22-25・27・36-22-25)

22は口縁部内面及び肩部に自然釉が付着し暗灰色になっている。底部は回転ヘラ切りである。高台は貼り付け後にナデられ、外端で接地する。23は頸部以上及び底部を欠失している。内面はロクロナデの痕が明瞭にあり、頸部の繋ぎ目が良くわかる。外面は良くナデられ、稜は不明瞭となっている。丸い肩部以上に自然釉が付着している。24は上半部を欠失している。長頸壺と考えたが、有台碗の可能性もある。ロクロナデで成形され、高台の外縁及び中央部はナデられ、中央部が窪み、内傾して外端で接地する。25は口縁部内面及び頸部に自然釉が付着し暗灰色になっている。27は肩部及び胴下半部に自然釉が付着し暗灰色になっている。ロクロナデで成形後、胴外面下半部に、回転ヘラ削りを施す。

22-25は胎土が精良で、白色細粒を含むことから、佐渡小泊窯産と思われる。27はやや粗い砂粒を含んでいることから、産地は不明である。

〔甕〕(図版16-26、17-29・30、36-26・29・30)

26は口縁部片である。ロクロナデで成形され、口縁端部は指で下方につまみ出されている。29は甕の胴部のみを残す。外面全体に平行タタキが施され、内面上半には平行な当て具痕、内面下半には同心円の当て具痕が顕著に認められる。30は底部のみである。外面全体に格子目のタタキが密に施され、内面上部に格子目と下半部に擬格子の当て具痕が見られる。底部はやや尖り気味な丸底である。

〔横瓶〕(図版17-28、36-28)

成形はロクロナデで、体部外面には平行タタキ目が施されている。内面は平行な当て具痕と思われるが不明瞭である。頸部及び体部上半に自然釉が付着し暗灰色になる。胎土は粗砂粒を含む。頸部と体部の境目に接合痕が認められる。

〔墨書土器〕(図版16-20・21、35-20・21)

20、21は無台杯の底部外面に「王」と読める墨書が施される。ただしこの文字についての意味は不明である。この2つは、佐渡小泊窯産のもので、9世紀末から10世紀初めごろのものと思われる。「王」と読める墨書土器について県内で確認されている確実な例としては、南蒲原郡田上町道下遺跡の土師器杯2点があり、体部外面に墨書されている¹⁾。

土師器(図版18-24、37-40)

土師器は須恵器に比べて出土数が多いことから、遺構内出土のものとそれ以外で分けた。遺物の集中する地点が大きく4地区あることから、その地区ごとに分けて記述を行う。なお各地

1) 田上町教育委員会 田畑弘氏の御教示による。

区は、包含層、遺構の双方を含むこととする。地区1は、2Cグリッドとそれに近接する地域とする。地区2は、3E、4F、5F、5Gグリッドとそれに近接する地域とする。地区3は、7C、8C、9C、10C、10Dグリッドとそれに近接する地域とする。地区4は、11G、11H、12G、12Hグリッドとそれに近接する地域とする。

土師器杯は、口径11.4~13.9cm、器高3.5~4.6cm、底径4.2~6.4cmのものが多く、口径14.4~18.3cm、器高4.4~5.5cm、底径5.5~8.9cmとやや大型のものもある。器の一部を欠失しているものは推察ではあるが、いずれも成形は、口縁部内外面がロクロナデ、底部の切り離しは回転系切りで行われている。

内黒の土師器は口径13.2~16.2cm、器高2.5~4.9cm、底径5.0~6.6cmを測る。成形はロクロナデによって行われ、体部外面下半以下は回転ヘラ削りが施されている。内面は良く磨かれた後に黒色処理されている。

土師器甕は口径12.4~15.0cm及び底径5.0~7.6cmで平底のものと、口径16.0~24.4cmと大型のものがある。成形はいずれもロクロナデで、体部内外面にカキ目、体部外面下半部、底部外面には平行タキ、内面には平行な当て具痕が認められる。小型で平底のものの底部の切り離しは回転系切りで行われている。胎土は粗砂粒が多く含まれる。口縁部内外面、体部内外面、底部内外面にスガが付着している。

鍋は口径28.2~44.6cmを測る。成形、調整は甕と一致する。

〈地区1遺構内出土土師器〉

〔杯〕(図版18-31、37-31)

31はピット39から出土している。ロクロナデ成形で、内面はとくに丁寧にロクロナデされている。底部の切り離しは回転系切りによって行われている。

〔甕〕(図版18-32~35、38-35)

32はSD3の出土である。外面は磨減が著しく不明瞭だがロクロ成形で、口縁部は外向し端部は上方につまみあげられている。33はSD3の出土である。ロクロ成形で、胴部外面はカキ目が施される。口縁部は短く、「く」の字状に外反し端部は上方につまみあげられて面を持つ。34はSD2の出土である。磨耗が著しく調整は不明瞭であるが、ロクロ成形で口縁部は短く、「く」の字状に外反し端部は上方につまみあげられ外側の面はわずかにくぼむ。体部内面にスガがわずかに付着している。35はSD2の出土である。ロクロ成形で、口縁部で「く」の字状に外反し、端部が上方へつまみあげられる。つくりはシャープである。体部外面に黒斑が残る。

〈地区2遺構内出土土師器〉

〔杯〕(図版18-36~41、35-36、37-37、38)

36はSD13出土の内黒の土師器である。ロクロナデにより良く器調整され、その後体部外面下半は回転ヘラ削りが施されている。底部外面は回転ヘラ削りの後、磨かれている。口唇端部はツمام出されてやや外反する。胎土は精良で黄褐色を呈する。口唇部と底部に黒斑を認める。

内面は黒色処理されているが口唇部と底部および体部下半には黒色のはげ落ちが認められる。外面はロクロナデの後に体部下半を回転ヘラケズリして滑らかな丸みをもたせている。37は3E12自然流水路の出土である。ロクロナデによって成形され、底部の切り離しは回転糸切りで行われている。外面と体部内面にスガ残り、口縁部内外面に黒斑が見られることから灯明皿と思われる。38は3E6自然流水路、39はSE5の出土である。ともにロクロナデによって成形され、底部の切り離しは回転糸切りで行われている。40はSD12の出土である。体部外面と底部に黒斑が認められる。ロクロナデによって成形され、底部の切り離しは回転糸切りで行われている。41はSK10の出土である。ロクロナデによって成形され、底部の切り離しは回転糸切りで行われている。底部外面に黒斑が残る。

〔壺〕(図版18-42-46、37-43、38-45)

42はビット6の出土である。成形はロクロナデによる。43はSK16の出土である。ロクロ成形で、シャープなつくりである。口縁部は、「く」の字状に外反し、端部が内側に折れ、外側に明瞭な面を持つ。体部内外面は粘土紐の接合痕が段をなしてそのまま残る。44はSK8の出土である。内外面ともロクロナデである。45はビット9の出土である。ロクロ成形で外面下半部には平行タタキが施されている。46はSD13の出土である。ロクロ成形で、体部内外面は粘土紐の接合痕が段をなしてそのまま残る。底部の切り離しは回転糸切りで行われている。

〔鍋〕(図版18-47、39-47)

47はビット9の出土である。ロクロナデによって成形され、体部上半部は内外面ともカキ目、下半部外面には平行タタキ、下半部内面には平行な当て具痕が残る。口縁端部は肥厚し上方へつまみ上げられる。

〈地区3 遺構内出土土師器〉

〔杯〕(図版19-48-54、37-54、40-48)

48はSD19の出土である。ロクロナデによって丁寧に成形され、外面に2条のヘラ記号が見られる。49はSD18の出土である。ロクロナデによって成形され、体部外面下半部にはロクロナデの稜が明瞭に残る。口縁部内外面から体部にわたって内面にスガが認められることから灯明皿に使用したと考えられる。50はSD18の出土である。ロクロナデによって成形され、底部の切り離しは回転糸切りで行われている。51はSD19の出土である。ロクロナデによって成形され、底部の切り離しは回転糸切りで行われている。体部は丸みをもち、口縁部が小さく外反する。52はSD20の出土である。ロクロナデによって成形され、底部の切り離しは回転糸切りで行われている。体部内面にわずかにスガが残る。53はSD19の出土である。ロクロナデによって成形され、底部の切り離しは回転糸切りで行われている。54はSK23の出土である。ロクロ成形で、底部の切り離しは回転糸切りで行われている。体部・底部外面にスガが薄く付着する。

〔鏝〕(図版19-55~61、38-56、57)

55はSD20の出土である。口縁部は短く外反し、端部は上方へつまみ上げられ外側に面を持つ。体部外面にカキ目を施し、口縁部・体部内面に炭化物が薄く付着する。56はSD18の出土である。体部外面にはロクロナデの後、カキ目が施されている。断面には粘土のつき目が明瞭で、小さな稜をそのまま残す。体部外面にはスガが付着する。57はSD20の出土である。上半部内外面はわずかにカキ目の痕が残り、下半部外面には平行タタキ、内面はわずかに平行な当て具痕が認められる。58はSD19の出土である。ロクロ成形で、口縁端部は面をもつが、上方へのつまみあげはゆるい。59はSK1の出土である。60はSK1の出土である。ロクロ成形され底部の切り離しは回転糸切りで行われ、平底となる。61はSD18の出土である。ロクロ成形で底部の切り離しは回転糸切りで行われている。体部外面にスガが薄く付着する。

〔鍋〕(図版19-62~64)

62はSD18の出土である。ロクロ成形で、口縁部外面に黒斑が残る。口縁端部はつまみあげられ、外側に面をもつ。63はSD19の出土である。体部外面にカキ目が施され、体部・口縁部内面に薄くスガが残る。口縁端部はつまみ上げられ外側に面をもちくぼんでいる。64はSD18の出土である。体部外面上部にわずかにカキ目の痕が残る。口縁部及び体部外面にスガが薄く残る。口縁部は肥厚し、端部が上方へつまみあげられる。

〈地区4 遺構内出土土師器〉

〔杯〕(図版20-65~75、35-66、37-67~69、40-70)

65はSD29出土の両面を黒色処理した土師器である。体部のたちあがりから考えて、皿の可能性もある。内面は平滑な磨きの後に黒色処理されている。外面は同心円状に細かな磨きの後に黒色処理が施されている。底部は丁寧な回転へら削りの施された可能性があり中央部が窪んで外縁部が高台様となる。胎土は精良で、砂粒と細かな石英粒を含む。66はSB35出土の内黒の土師器である。内面は良く磨かれて黒色処理されている。黒色処理は一部口唇部外面に及んでいる。外面は口縁部を除き細かな稜のロクロナデが施され、下半部ではへら削りによって滑らかになっている。底面は磨減していて不明瞭だが回転へら削りによって行われており、やや凹面状となっている。底面端部に黒斑が認められる。67はSB35の出土である。内外面ともに丁寧にロクロナデが施され、底部の切り離しは回転糸切りで行われている。体部は丸味を持ち、口縁部はわずかに外反する。68はSB35の出土である。69はSK36の出土である。外面には細かなロクロナデの稜を残し、底部の切り離しは回転糸切りで行われている。SK36から出土した完形の杯の他の2点も同様である。70はSB35の出土である。底部の切り離しは回転糸切りで行われ、その後十文字状のへら記号が施される。71はSD29の出土である。底部の切り離しは回転糸切りで行われている。72はSD31の出土である。底部の切り離しは回転糸切りで行われている。73はSX25の出土である。74はSB35の出土である。底部の切り離しは回転糸切りで行われている。75はSD26の出土である。体部外面はロクロナデの稜を残す。底部の切り離

しは回転系切りで行われている。

〔甕〕(図版20—76—82、37—77・79、38—81・82、40—77)

76はS B35の出土である。77はS B35の出土である。底部の切り離しは、回転系切りで行われ、平底となる。78はS X25の出土である。器壁の磨減が著しく調整は不明である。79はS B35の出土である。器壁は薄く丁寧なロクロナデで、底部の切り離しは回転系切りで行われ、平底となる。体部外面にスガがやや厚く付着する。80はS B35の出土である。底面の切り離しは、回転系切りで行われ、平底となる。81はS D19の出土である。内外面ともにスガが厚く認められる。外面には平行タタキ、内面に平行当て具痕を施す。底部の厚さが極端に薄くなる。82はS X25の出土である。外面にスガが残る。外面は平行タタキ、内面に平行な当て具痕が施されている。

〈I区遺構外出土土師器〉

〔杯〕(図版20—83—85、37—83・84、40—84)

83は底部は磨減していて不明瞭だが、切り離しは回転系切りで行われたと思われる。84の底部の切り離しは回転系切りで行われた後、「×」字状のヘラ記号が施されている。

〔甕〕(図版20—86—89、38—88)

86は口縁部は、くの字状に外反し、端部が上方へつまみあげられ、その外側が外傾する面をもつ。外側の面はわずかにゆるくくぼんでいる。体部外面にわずかにカキ目の痕が残る。87の底部の切り離しは回転系切りで行われ、平底となる。88は体部外面にはスガが薄く付着する。体部外面には平行タタキ、内面には平行な当て具痕が施される。89の口縁部は、「く」の字状に外反し、端部が上方へつまみあげられ、その外側に面をもつ。体部内外面にわずかにハケ目の痕が認められる。

〈地区2遺構外出土土師器〉

〔杯〕(図版21—90—95、35—90、37—91—95)

90は内黒の土師器である。内面は磨かれて黒色処理されるが、口縁部外面にまで著しく及んでいる。内面中央部にやや盛り上がりが見られる。外面は丁寧に細かなロクロナデの後に体部下半で回転ヘラ削りが施されている。底部は回転ヘラ削りの後、磨かれている。91は体部下半にロクロナデの稜が明瞭に残る。92は口縁部内外面にスガが付着していることから灯明皿として使用されたものと思われる。

〔甕〕(図版21—96—104、37—96)

96はシャープなつくりで、口縁部は、「く」の字状に外反し、端部は上方へつまみあげられる。口縁部内外面及び体部外面にスガが残る。98は体部外面にロクロナデの稜を残す。99は口縁部に粘土紐の接合痕が明瞭に残る。100は口縁部が、「く」の字状に外向し端部は上方へつまみあげられる。103は口縁部内外面、及び体部外面にスガが認められる。104は体部内面、体部外面下半部、底部外面にスガが認められる。底部の切り離しは回転系切りで行われている。

〔鍋〕(図版21-105)

105の体部内外面にカキ目が施されている。

〈地区3 遺構外出土土師器〉

〔杯〕(図版21-106-113、37-110・111・113、40-111)

106は内黒の土師器である。内面は磨かれて黒色処理されるが、体部外面にまで著しく及んでいる。外面は丁寧に細かなロクロナデの後に、体部下半に回転ヘラ削りが施されている。107は大形の杯である。底部の切り離しは回転糸切りで行われている。108の体部は内外面ともに丁寧にロクロナデが施される。110は底部内面にススが薄く付着していることから灯明皿として使用されたものとする。111は底部の切り離しが回転糸切りで行われ、その後、2条のヘラ記号が施されている。

〔甕〕(図版22-114-127、37-114、126、127、40-123)

122の体部外面はカキ目が施されている。123は頸部に粘土紐の接合痕が認められる。124は口縁部外面にススが薄く付着する。体部外面にカキ目が施されている。126は体部外面にカキ目が施されている。127は体部外面にカキ目が施されている。また体部外面にはススが薄く付着する。

〔鍋〕(図版23-128・129、39-129)

128の口縁端部は肥厚し上方へつまみあげられている。129は体部の外面上半部でわずかにカキ目の痕が残り、下半部は平行タタキ、内面は平行な当て具痕が施されている。体部外面には薄くススが付着する。

〈地区4 遺構外出土土師器〉

〔杯〕(図版23-130-134、35-130・131、40-133)

130は内黒の土師器である。胎土は精良で、砂粒、石英粒を含む。焼成は良好で橙褐色を呈する。体部外面下半は回転ヘラ削りによって滑らかとなり、底部は回転ヘラ削りのまま磨かれない。内面は磨かれて黒色処理されている。131は内黒の土師器である。胎土は精良で、焼成も良好、白黄褐色を呈する。外面は口縁部にロクロナデの稜を残すが体部以下は回転ヘラ削りによって滑らかに調整され、底部外面ではその後磨かれている。底部は削り出し高台かとみられ、やや外端が接地している。高台内面はヘラ削りされ、滑らかに窪んで中央部はやや高まりをみせる。132-134の底面の切り離しは回転糸切りで行われている。

〔甕〕(図版23-135-137、37-135、38-137)

135の体部外面にはカキ目が施されている。136の体部外面にススが薄く残る。

〔鍋〕(図版23-138・139、24-140-142、39-140-142、40-142)

140は口縁部及び体部外面にススが付着する。142は体部内外面にススが薄く付着する。体部外面下部に平行タタキ、体部内面はカキ目の後、下部に平行な当て具痕が施されている。体部に粘土紐の接合痕がみられる。

〈石製品〉(図版24-143-148、40-143-145・147・148)

石製品は、ほとんどが砥石で大型のもの(143)と小型のもの(144~148)がある。前者は置き砥石、後者は手持砥石として使用されたものと思われる。

143は最大長16.8cm、最大幅9.9cm、最大厚9.8cm、重量744.2gを測る。円柱形を呈し、一端を欠く。折れた箇所以外はほぼ全面に幅2~3cmほどで帯状の擦痕がある。144は最大長11.25cm、最大幅5.5cm、最大厚3.4cm、重量274.9gを測る。偏平な形状を呈し、一側面に擦痕を持つ。145は最大長7.2cm、最大幅5.2cm、最大厚5.2cm、重量217.5gを測る。一端を欠くが、もう一方の端及び側面に敲打痕がある。正・裏面と一側面に擦痕を持つ。146は、最大長6.25cm、最大幅2.8cm、最大厚2.20cm、重量48.2gを測る。偏平な形状を呈し、正・裏面に擦痕を持つ。147は最大長5.2cm、最大幅3.5cm、最大厚3.5cm、重量20.2gを測る。割れた痕が擦痕のようにも見られる。148は最大長5.5cm、最大幅6.1cm、最大厚5.3cm、重量149.1gを測る。平面台形を呈し、正・裏面と一側面に擦痕がある。

石材は143、147が軽石、144、145、148が凝灰岩、146が流紋岩である。

土器観察表

須恵器

番号	地点	器種	法量	胎土	色調	形状	手法	備考
1	HD7Vb	無台杯	111.8 底7.0 高3.1	白色顔料	灰	甗	既外同様に フ切り	既外へフ切り 左側板
2	HD16Vb	無台杯	112.0 底7.0 高3.3	白色顔料	灰	甗	既外同様に フ切り	既外同様に フ切り 左側板
3	HD25Vb	無台杯	111.6 底8.0 高2.9	白色顔料	灰	甗	既外同様に フ切り	
4	HD10Vb	無台杯	112.0 底7.2 高3.0	白色顔料	灰	甗	既外同様に フ切り	
5	2B16Vb下	無台杯	112.1 底7.2 高2.9	白色顔料	暗灰	甗	既外同様に フ切り	転用観
6	HD12Vb	無台杯	112.0 底10.8 高3.1	白色顔料	灰	甗	既外同様に フ切り	転用観
7	HD17Vb	無台杯	112.2 底7.0 高2.6	白色顔料	灰	甗	既外同様に フ切り	転用観
8	HD13Vb HD25Vb	無台杯	112.2 底8.0 高3.0	白色顔料	灰	甗	既外同様に フ切り	転用観
9	HD10Vb	無台杯	112.0 底7.2 高3.2	白色顔料	灰	甗	既外同様に フ切り	
10	SK10	無台杯	112.2 底8.0 高3.1	白色顔料	灰	甗	既外同様に フ切り	
11	HD15Vb	無台杯	112.4 底7.2 高3.1	白色顔料	灰	甗	既外同様に フ切り	
12	HD14Vb	無台杯	112.6 底7.6 高3.2	白色顔料	灰	甗	既外同様に フ切り	
13	DC14Vb	無台杯	112.4 底7.0 高3.5	白色顔料	灰	甗	既外同様に フ切り	転用観
14	HD25Vb	無台杯	113.6 底7.8 高2.9		灰	甗	既外同様に フ切り	
15	HD12Vb	有台杯	底7.0		暗灰	甗	既外同様に フ切り	
16	HD1Vb	杯蓋	112.2	白色顔料	灰	甗		転用観
17	HD24Vb	杯蓋	113.6	白色顔料	灰	甗		転用観

須恵器

番号	地点	器種	法量	胎土	色調	形状	手法	備考
18	4F6Vb 3F11Vb下 3F21Vb下	杯蓋	112.2 底13.0 高2.85	白色顔料	灰	甗		転用観
19	9D11Vb下 9C8 8CSD6	杯蓋	115.7		灰	甗		
22	3F17 自然流水路	灰窯蓋	117.2 高20.0	白色顔料	灰	甗		
23	1CS01Vb下	灰窯蓋		白色顔料				
24	16G21Vb	甗	底7.4		暗灰	甗	既外同様に フ切り	
25	9C23Vb	灰窯蓋	112.4	白色顔料	暗灰	甗		
26	SK38	甗	112.0		灰	甗		
27	4G1Vb下	灰窯蓋			暗灰	甗		
28	DC1-3Vb下 1C21Vb下	甗蓋	112.0		灰	甗		
29	3D3Vb下	甗			暗灰	普通		
30	3C14	甗		白色顔料	灰	甗		

地区1遺構内 土師器

番号	地点	器種	法京	胎土	色調	地味	手法	備考
31	3CSK1	無台杯	112.4 高5.4 径4.2	高良	黄緑	堅	既外回転糸 知り	
32	2BSD1 II	甕	112.0	中硬	棕褐	普通	口フコ	
33	2BSD1 II	甕	119.0	中硬	黄緑	堅	口フコ	
34	3CSOV5下	甕	121.2	小硬	黄緑	普通	口フコ	体部内面に スス
35	3CSO2	甕	122.0	中硬	黄緑	普通	口フコ	体部外面に スス

地区2遺構内 土師器

番号	地点	器種	法京	胎土	色調	地味	手法	備考
36	4PS2	無台杯	115.3 高6.4 径4.9	高良	黄緑	普通	既外へラ知 り	内壁上器
37	2B22 自然流水跡	無台杯	112.0 高5.2 径4.5	高良	黄緑	普通	既外回転糸 知り	11層外面、 体部内外面 にスス 打明渠
38	2E5 自然流水跡	無台杯	111.0 高4.6 径4.2	小硬	黄緑	普通	既外回転糸 知り	
39	3H38E3	無台杯	112.2 高4.9 径4.3	中硬	黄緑	普通	既外回転糸 知り	
40	4PSDISE3	無台杯	105.2	小硬	黄緑	軟	既外回転糸 知り	
41	3PSK1 III	無台杯	105.5	小硬	黄緑	堅	既外回転糸 知り	
42	P06	甕	117.0	小硬	黄緑	普通	口フコ	
43	4GSK2	甕	119.8	小硬	黄緑	普通	口フコ	
44	3FVA12 SK8	甕	115.0	小硬	黄緑	堅	口フコ	
45	3F213	甕		中硬	黄緑	軟	口フコ	
46	4PSD1	甕	106.6	中硬	黄緑	軟	口フコ	
47	3F212	甕	137.0	中硬	黄緑	軟	口フコ	

地区3遺構内 土師器

番号	地点	器種	法京	胎土	色調	地味	手法	備考
48	3C2SD5下	杯	112.0 高良 小硬	高良	黄緑	堅		体部外面へ ラ記号
49	3C3 3CSD6	杯	114.0 高良 小硬	高良	黄緑	堅		11層、体部 内面にスス 打明渠
50	3C17SD6	無台杯	113.0 高良 高5.0 径4.0	高良	黄緑	堅	既外回転糸 知り	
51	3CSD19	無台杯	112.7 高良 高4.6 径4.0	高良	黄緑	軟	既外回転糸 知り	
52	3BSD4 B020, 25	無台杯	112.7 高良 小硬	高良	黄緑	普通	既外回転糸 知り	
53	3C2SD5下	無台杯	106.2 高良 小硬	高良	黄緑	堅	既外回転糸 知り	
54	10OSK1下	無台杯	106.4 高良	高良	黄緑	堅	既外回転糸 知り	
55	3BSD4	甕	117.0	小硬	黄緑	堅	口フコ	11層、体部 内面にスス
56	3C17SD6	甕	120.8	大硬	黄緑	普通	口フコ	11層外部、 体部内外面 にスス
57	3BSD4	甕		小硬	黄緑	普通	口フコ	
58	3CSD5	1甕	116.0	小硬	黄緑	軟	口フコ	
59	7DSK10上	甕	112.0	小硬	黄緑	普通	口フコ	
60	7DSK10上	甕	127.0	大硬	棕褐	普通	既外回転糸 知り	
61	3C21SD6	甕	105.0	大硬	黄緑	普通	既外回転糸 知り	体部外面に スス
62	3C13 3CSD6	甕	128.2	小硬	黄緑	普通	既外回転糸 知り	11層外部に スス
63	3C9, 3C中 SD6	甕	113.0	中硬	黄緑	普通	口フコ	11層、体部 内面にスス
64	3CSD6	甕	144.0	小硬	黄緑	軟	口フコ	11層、体部 外面にスス

地区4 遺構内 土師器

番号	地点	器種	法量	胎土	色調/焼成	手法	備考
65	11HS03	無台杯	高5.6	石灰粉	黄褐色	既外へツ刷	内面上器
66	12HSBIVb	無台杯	113.8 高5.9 高4.7		黄褐色	既外へツ刷	内面上器
67	12HSBI SK1	無台杯	113.5 高4.4 高4.0		黄褐色	既外刷転点 刷り	
68	12HSBI75	無台杯	112.9 高5.0 高4.1		黄褐色	普通	
69	12HSBI SK1	無台杯	113.2 高5.0 高3.7		黄褐色	既外刷転点 刷り	
70	12HSBIIV	無台杯	113.4 高5.4 高3.7		黄褐色	既外刷転点 刷り	既器外面へ ツ記号
71	11G13Vb SD29	無台杯	高4.8		黄褐色	既外刷転点 刷り	
72	12HTVb SD01	無台杯	高5.1		黄褐色	既外刷転点 刷り	
73	11F14Vb SK25	無台杯	高5.4		黄褐色	普通	
74	12HSBK35	無台杯	高6.0 小破		黄褐色	既外刷転点 刷り	
75	11G14Vb	無台杯	高5.0 小破		黄褐色	既外刷転点 刷り	
76	12H3	甗	113.0 小破		黄褐色	既外刷転点 刷り	
77	12HSK35 P3	甗	高5.6 小破		黄褐色	既外刷転点 刷り	
78	11FSK1	土甗	高6.0 小破		黄褐色	既外刷転点 刷り	
79	12HSK03	甗	高5.1 高脚		黄褐色	既外刷転点 刷り	体部外面に スス
80	12H11Vb	甗	高7.2 小破		黄褐色	既外刷転点 刷り	
81	SD19	甗	小破		黄褐色	普通	内外面にス ス
82	11FSX1	土甗	小破		黄褐色	普通	外面にスス

地区1 遺構外 土師器

番号	地点	器種	法量	胎土	色調/焼成	手法	備考
83	2CVb	無台杯	111.8 高脚 高3.8		黄褐色	既外刷転点 刷り	
84	1C21Vb F	無台杯	112.0 高5.4 高4.15		黄褐色	既外刷転点 刷り	既器外面に へツ記号
85	2C18Vb F	杯	115.0 小破		黄褐色	普通	
86	1C18Vb F	甗	119.2 小破		黄褐色	普通	口ツロ
87	1B20Vb F	甗	高5.2 小破		黄褐色	既外刷転点 刷り	
88	2B16Vb F	甗	小破		黄褐色	普通	外面にスス
89	2CVb F	甗	119.0 中破		黄褐色	普通	口ツロ

地区2 遺構外 土師器

番号	地点	器種	法量	胎土	色調/焼成	手法	備考
90	3E17Vb F	無台杯	114.0 高5.8 高4.9		黄褐色	普通	既外へツ刷 り
91	3F17Vb	無台杯	113.6 高4.2 高4.3		黄褐色	既外刷転点 刷り	
92	6G14Vb	無台杯	112.4 高5.2 高4.2		黄褐色	既外刷転点 刷り	11線、体部 内外外面に スス 有明眼
93	5 F 20Vb F	無台杯	112.8 高4.8 高4.2		黄褐色	既外刷転点 刷り	
94	4PVb	無台杯	111.4 高5.0 高4.1		黄褐色	普通	
95	3E11Vb F	無台杯	112.5 高4.6 高4.1		黄褐色	普通	
96	4F1Vb F	甗	113.4 高脚		黄褐色	既外刷転点 刷り	11線内外、 体部外面に スス
97	5G11Vb F	甗	114.6 小破		黄褐色	普通	口ツロ
98	4F13Vb	甗	119.8 小破		黄褐色	既外刷転点 刷り	口ツロ
99	5G23Vb F	甗	124.4 小破		黄褐色	既外刷転点 刷り	口ツロ
100	5G12Vb	甗	114.8 小破		黄褐色	既外刷転点 刷り	口ツロ
101	4F8Vb F	甗	112.4 小破		黄褐色	既外刷転点 刷り	口ツロ
102	6G23Vb	甗	118.7 中破		黄褐色	普通	口ツロ
103	4E3Vb	甗	121.0 小破		黄褐色	普通	口ツロ
104	3E13Vb F	甗	高7.6 小破		黄褐色	既外刷転点 刷り	内外面にス ス
105	4F1Vb F	甗	114.6 小破		黄褐色	既外刷転点 刷り	口ツロ

地区3遺構外 土師器

番号	地点	器種	法量	胎土	色調	焼成	手法	備考
106	11C35Vb	杯	116.2 小體	黄陶	青緑			内里土器
107	10D7Vb	無台杯	115.6 小體 96.6 55.5	黄陶	青緑	底外回転糸 罫り		
108	9D6Vb	無台杯	118.2 精良 98.9 54.4	黄陶	紫			
109	10C5Vb	杯	113.6 小體	黄陶	紫			
110	9C18Vb	無台杯	114.8 精良 95.4 54.4	黄陶	紫	底外回転糸 罫り	底部内面に 又ス 打明垂	
111	8E10Vb上	無台杯	112.8 精良 94.8 54.6	黄陶	青緑	底外回転糸 罫り	底部外面に へラ記号	
112	9C25Vb	無台杯	95.3 精良	黄陶	紫	底外回転糸 罫り		
113	9D21Vb	無台杯	113.8 精良 96.4 53.8	黄陶	青緑			
114	10D18Vb	甗	113.7 小體 97.0 高12.2	黄陶	紫	口フロ		
115	10D1Vb	甗	114.2 精良 小體	黄陶	紫	口フロ		
116	10D7Vb	甗	115.6 小體	黄陶	紫	口フロ		
117	9C8Vb	甗	96.6 小體	黄陶	紫	口フロ		
118	9C19Vb	甗	96.6 小體	黄陶	紫	口フロ		
119	9C21Vb	甗	113.8 精良 細體	黄陶	青緑	口フロ		
120	8E2Vb	甗	118.2 小體	黄陶	青緑	口フロ		
121	9C5Vb	甗	119.4 小體	黄陶	紫	口フロ		
122	8E2Vb	甗	121.2 中體	黄陶	青緑	口フロ		
123	9C20Vb	甗	123.2 小體 精良	黄陶	青緑	口フロ		
124	9C20Vb	甗	123.6 小體	黄陶	紫	口フロ		
125	10D7Vb	甗	119.8 小體	黄陶	紫	口フロ		
126	9C25Vb	甗	120.6 中體	黄陶	紫	口フロ		
127	9C3, 4Vb	甗	119.4 小體	黄陶	青緑	口フロ	底部外面に 又ス	
128	9C19Vb	甗	136.6 中體	黄陶	青緑	口フロ		
129	11D16Vb	甗	135.2 中體	黄陶	紫	口フロ	底部外面に 又ス	

地区4遺構外 土師器

番号	地点	器種	法量	胎土	色調	焼成	手法	備考
130	4F50E	無台杯	95.2 精良 打英粒	黄陶	紫			底外回転糸 罫り
131	12H15Vb	無台杯	112.2 精良 96.6 52.5	白陶	紫			内里土器
132	11F15Vb	無台杯	113.9 精良 95.4 53.9	黄陶	紫			底外回転糸 罫り
133	11F25Vb	無台杯	111.8 精良 95.5 52.0	黄陶	紫			底外回転糸 罫り
134	11G20Vb	無台杯	112.2 精良 95.3 54.4	黄陶	紫			底外回転糸 罫り
135	11H21Vb	甗	124.6 小體	黄陶	青緑	口フロ		
136	12H12Vb	甗	122.6 小體	黄陶	紫	口フロ		底部外面に 又ス
137	11H21Vb	甗	123.6 精良 小體	黄陶	紫	口フロ		
138	12H25Vb	甗	130.6 小體	白陶	紫	口フロ		
139	12H25Vb	甗	135.6 中體	黄陶	紫	口フロ		
140	12H25Vb	甗	146.4 精良 小體	黄陶	青緑	口フロ		口縁、底部 外面に又ス
141	12H12Vb	甗	130.6 小體	黄陶	青緑	口フロ		
142	11G4Vb 11G8Vb 11G20Vb	甗	140.6 小體	黄陶	紫	口フロ		底部内外面 に又ス

第IV章 総 括

1. III b層水田跡について

III b層は試掘坑7～13の範囲で検出された水田跡であることは5ページで述べた。この面からは、発掘調査中に瀬戸物の破片、針金、ガラス片などが出たことで近世よりも新しい時代のものである事も予測された。しかしC₁₀のサンプルを採集した箇所と同じ深さで出たことから、平安時代の水田跡の期待がもたれていた。発掘したところ、稲株が規則的に並び、その間隔は約30cmと現在の稲作りに近いものであった。また田面の周りにハサ木の根の列が一直線に並び、水田の畦畔自体も一直線に35mもあったことから次のような検討を行い、近世よりも新しいことを結論づけた。

- ①土層断面を詳細に検討。——出土遺物の中に近代の瀬戸物・ガラス片のあったところが、III b層であること。
- ②出土遺物の偏りと出土状況の検討（出土遺物による時代確定）。
- ③ハサ木を植えるようになった時代についての、近世史による時代考証。——ハサ木が新潟沖積平野のシンボルとなったのは近世の後半であった。
- ④更生図の分析。——明治時代の更生図ではここがそっくり水田となり、隣接する微高地は桑畑となっていた。そして、この水田面の土層は最大5層位に分かれる。深く耕した跡がうかがえない事から、深田で年中灌水していたものと考えられる。層位を分ける砂は阿賀野川が運んで来たものであろう。

2. 平安時代の遺構・遺物について

遺構が集中しているのは、遺跡西側の低くなった沼地部分に向かって流れ込む、自然流水路の部分である。そして、この溝よりも僅か20～30cm高い微高地に遺構が集中している。海拔2.9～3.0mのところである。グリッドでは、3・4-D・E・F・Gと10・11-F・Gである。前者にはSE5、ピット6～39、SX40、SK10・14・15などがある。この場所ではピット列が並ばないため、柱穴の確認などはできなかったが、遺物量・井戸の存在・そしてSK10にみられるような鍋を使用した痕跡のあるところから、ここで何らかの生活を営んでいたことが予測される。自然流水路に流れ込んで来ている遺物も、法線外の南西側に居住の跡をうかがわせるに十分な資料である。

一方、もう一つの遺物・遺構集中区の10・11-F・Gには掘立柱建物跡と考えられるものが

ある。ここはピットが一列に並び、どのピットからも炭や遺物の出土をみている。この中央部にあるSK36の炭の層の中に、土師器の杯を入れたものは、SK10の遺構とよく似た構造をとる。浅い穴の中で火を焚き、ここに土器を入れて煮炊きしたのではないと思われる土器の二次焼成が認められている。図版20、69の遺物をはじめ完形の土師器の杯がかたまって土坑の中から3点出ている。火を受けた跡が認められるのである。掘立柱建物と地床がの組み合わせは、日本海側積雪地帯の山間部にその分布が認められており、民族学で指摘されてきた資料が考古学的に現れている事例として面白い¹⁾。

SD12~24は畝状の遺構である。用途は全く不明であるが、水をぬく部分が欠けていることから排水を目的としたものではなさそうである。下層から炭とともに多量に出土している土師器・須恵器は完形にならず、かといって土器を捨てるためにこのように規則的に掘ったものとも考えられない。このような溝状遺構は、規模・大きさがさまざまであることが原山・大塚遺跡はじめ、県下多くの遺跡で検出されており、今後検討を要する資料である。

遺物については次のことがいえる。

- ①土師器と須恵器の比率は7:2と圧倒的に土師器の占有率が高い。
- ②須恵器の無台杯の底面の切り離しは、全て回転ヘラ切りで行われている。
- ③須恵器は佐渡小泊産のものが主体となる。
- ④土師器の杯・甕では底部が遺存しているもので判断すると、全て底面の切り離しが回転系切りの無調整で行われている。
- ⑤大形甕・鍋の口縁端部は屈折して短くたち上がるものが多い。
- ⑥甕は体部下半に平行タキ目を残すものが目立つ。
- ①~⑥は今池編年のVI期に類似する点が多く見られる。このことから遺物の年代は9世紀末から10世紀初めに比定されるものと思われる。

3. 遺跡の性格

従来、新潟平野の低湿地の開発は江戸時代中期以降というのが一般的であったが、この遺跡は、平安時代中期、沖積地の水田開発を主要な目的として成立したものと考えられる。平安時代の水田部検出はできなかったが、水稲栽培に伴うものと予測している。

また、土器は9世紀末から10世紀初めのものが多量に出土していることから、この頃から開発が盛んになったものであろう。条件の悪い低湿地で開発が盛んになるのは、周辺遺跡の節でも述べたが、この時代を一つのピークとする。

1) 杉本尚次は日本民家の研究を行い、日本海側に地床がの掘立柱建物の分布が偏っていることを明らかにした。

4. 要約

- ①上郷遺跡 I は平安時代中期の遺跡である。
- ②沖積地の開発が盛んになる平安時代の遺跡の一つである。
- ③出土遺物は、土師器・須恵器が主体を占め、土師器の量は須恵器の3.5倍に達する。時期は平安時代9世紀末から10世紀初めのものである。(今池VIに比定)
 - ・須恵器の無台杯はすべて回転ヘラ削りである。土師器は無台杯のすべてが回転糸切りである。

学園院大学放射能炭素年代測定結果報告書

新潟県教育委員会

1990年 12月 1日

1990年 11月 1日受領致しました試料についての年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

なお年代値の算出には ^{14}C の半減期として LIBBY の半減期 5570 年を使用しています。また付記した誤差は β 線の計数値の標準偏差 σ にもとずいて算出した年数で、標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代です。また試料の β 線計数率と自然計数率の差が 2σ 以下のときは、 3σ に相当する年代を下限の年代値(B.P.)として表示してあります。また試料の β 線計数率と現在の標準炭素(MODERN STANDARD CARBON)についての計数率との差が 2σ 以下のときには、Modern と表示し、 $\delta^{14}\text{C} \%$ を付記してあります。

記

Code No.	試料	年代(1950年よりの年数)
GaK-15293	竹 from 上郷遺跡	460 ± 80
	上郷A 群直下(竹) 田面 L	A.D. 1490
GaK-15294	草 from 上郷遺跡	660 ± 70
	上郷A 群上の草 G	A.D. 1290

以上

引用・参考文献

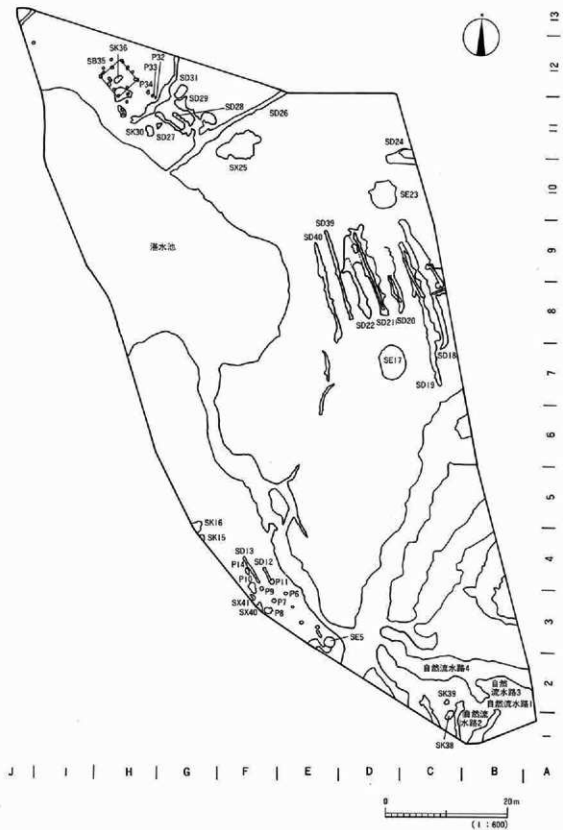
- 赤羽正春 1978 「郷地について」『豊栄市史研究』豊栄市教育委員会
- 阿部洋輔 1980 「荘園の成立」『新発田市史・上』新発田市
- 家田順一郎 1981・1982 「曾根遺跡Ⅰ・Ⅱ」北蒲原郡豊浦町教育委員会
- 池田 亨 他 1975 「長表遺跡」六日町教育委員会
- 大橋信彦 1992 「栄町文化財調査報告書第6編 安代・道西・大原遺跡」南蒲原郡栄町教育委員会
- 金子拓男 1987 「古代における信濃川・阿賀野川の流路について」『新潟江南高校研究収録15』新潟江南高校
- 川上貞夫 1988 「新津市史・原始・古代編」新津市教育委員会
- 川上貞夫 1982 「貝屋須恵器窯址」北蒲原郡加治川村教育委員会
- 北野博司 1988 「土師器の生産と供給」『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題・報告編』石川考古学研究会
- 京ヶ瀬村教育委員会 1967 『京ヶ瀬村史』
- 土田孝雄 他 1988 「須沢角地A遺跡発掘調査報告書」西頸城郡青海町教育委員会
- 酒井和男 1987 「大江山地区の遺跡」新潟市教育委員会
- 坂井秀弥・鶴間正昭・春日真実 1991 「佐波の須恵器」『新潟考古第2号』新潟県考古学会
- 坂井秀弥 他 1989 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集 新新バイパス関係 山三賀Ⅱ遺跡」新潟県教育委員会
- 佐々木高明 1993 「日本文化の基層を探る—ナラ林文化と照葉樹林文化—」日本放送出版協会
- 品田高志 他 1990 「柏崎市埋蔵文化財調査報告書第13集 吉井遺跡群Ⅱ」柏崎市教育委員会
- 杉本尚次 1969 「日本民家の研究—その地理学的考察—」ミネルヴァ書房
- 杉本尚次 1977 「地域と民家—日本とその周辺—」明玄書房
- 鈴木俊成 1989 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第54集 北陸自動車道野口下・美山遺跡」新潟県教育委員会
- 関 雅之 1988 「島屋遺跡Ⅰ・Ⅱ」『豊栄市史 資料編1考古』豊栄市
- 関 雅之 1986 「集落と生産遺跡」『新潟県史 通史編1（原始・古代）』新潟県
- 関 雅之・木間信昭 1981 「新潟県北蒲原郡豊浦町真木製鉄遺跡の発掘調査報告」豊浦町教育委員会
- 高橋 保 他 1986 「新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第40集 一之口遺跡西地区」新潟県教育委員会
- 高橋 勉 1989 「杉明遺跡発掘調査報告書」新井市教育委員会
- 武田広昭 1970 「福島湖における新田村落の展開」『福島湖—福島湖干拓地域民俗緊急調査報告書—』新潟県教育委員会
- 寺崎裕助 他 1988 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第50集 北陸自動車道 原山・大塚遺跡」新潟県教育委員会
- 戸根与八郎 1973 「新潟県北蒲原郡加治川村下小中山の須恵器窯址」『越佐研究 33』新潟県人文研究会
- 戸根与八郎 1975 「埋蔵文化財緊急調査報告書第4 長畑遺跡」新潟県教育委員会
- 戸根与八郎 他 1984 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集 今池・下新町・子安遺跡」新潟県教育委員会
- 中川成夫 1956 「新津田屋七本松須恵器窯跡発掘調査報告」『越佐研究 11』新潟県人文研究会
- 中村 浩 1980 「須恵器」考古学ライブラリー5 ニューサイエンス社
- 新潟県史編纂室 1982 「新潟県史 資料編8（近世三 下越編）」

- 新潟県教育庁文化行政課 1979 『新潟県遺跡地区』新潟県教育委員会
- 福島県立博物館 1993 「南山田遺跡」『発掘ふくしま』
- 藤塚 明 他 1987 『新潟市小丸山遺跡発掘調査概報』新潟市教育委員会
- 藤巻正信 他 1988 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第27集 西田・鶴巻田遺跡』新潟県教育委員会
- 本間嘉晴 1986 「小泊窪址群」『新潟県史 通史編1 (原始・古代)』新潟県
- 山本 肇 他 1983 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第33集 内越遺跡』新潟県教育委員会
- 山本 肇 他 1985 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第37集 金屋遺跡』新潟県教育委員会
- 渡辺ますみ 1990 「新潟県における古代・中世の井戸」『新潟県考古学談話会会報No.6』新潟県考古学談話会
- 渡辺ますみ 1991 『亀田町文化財調査報告書第3集 荒木前遺跡』亀田町教育委員会

図 版

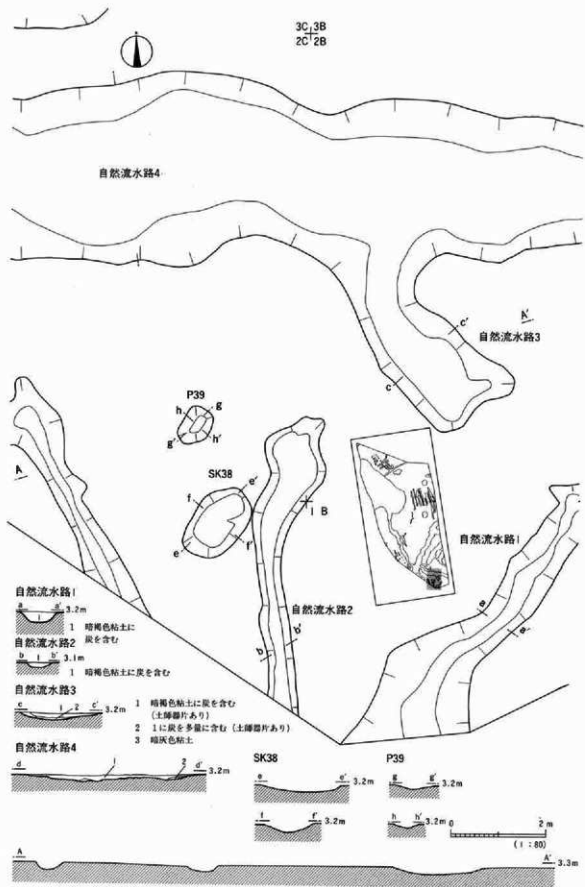
凡 例

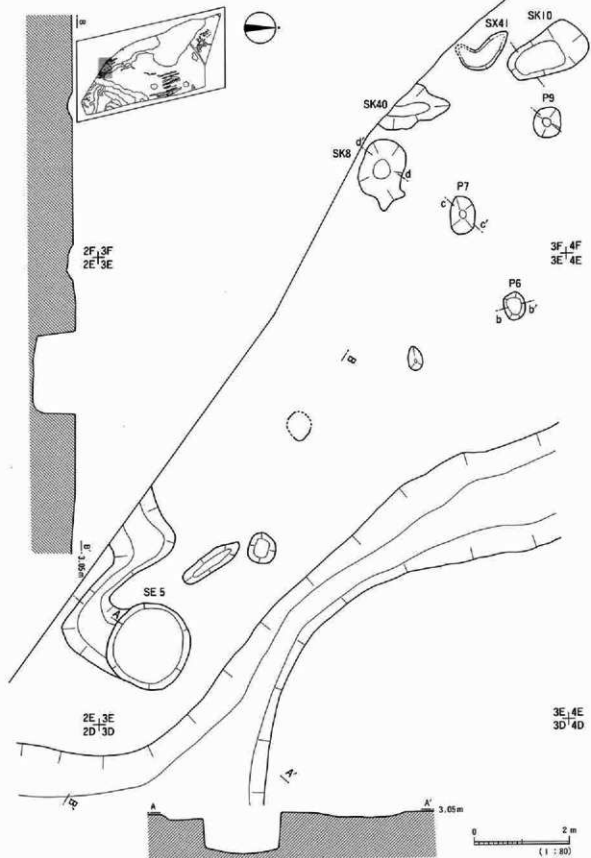
1. 遺構はすべて南東より一連番号を付し、
独立柱建物＝S B、溝＝S D、井戸＝S E、
土坑S K、ピット＝P、性格不明遺構＝S
X、などで分類した。
2. 遺構実測図は遺構全体図を1：600、部分
図を1：80、遺構断面図を1：40でそれぞ
れ取めた。
3. 土器はすべて一連番号を付し、図版・写
真図版と共通させた。土器の種別によって、
断面の表示を、土師器＝白抜き・須恵器＝
黒とした。
4. 遺物観察表の番号は遺物実測図の番号と
共通している。

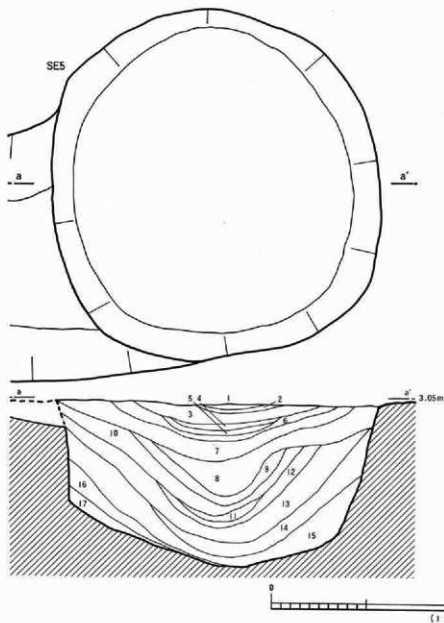


J | I | H | G | F | E | D | C | B | A

0 20m
(1 : 600)







- 1 黒色シルト
- 2 暗灰褐色シルト
- 3 暗褐色シルト
- 4 暗灰色シルトに炭を少量含む
- 5 4よりも炭を多く含む
- 6 5よりも明るい

- 7 黒色土に腐植土を多く含む
- 8 暗灰褐色シルトに褐鉄鉱の末を含む
- 9 8よりも黒い
- 10 8とはほぼ同じだが粘土質に近い
- 11 黒色腐植土
- 12 暗灰褐色シルト

- 13 暗褐色シルトに多量の腐植土を含む
- 14 青灰色シルト
- 15 暗青灰色シルトに褐鉄鉱の末を含む
- 16 青灰色粘土
- 17 16よりも暗色を呈す

P6



- 1 暗褐色土に炭を含む

P7

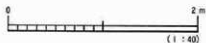


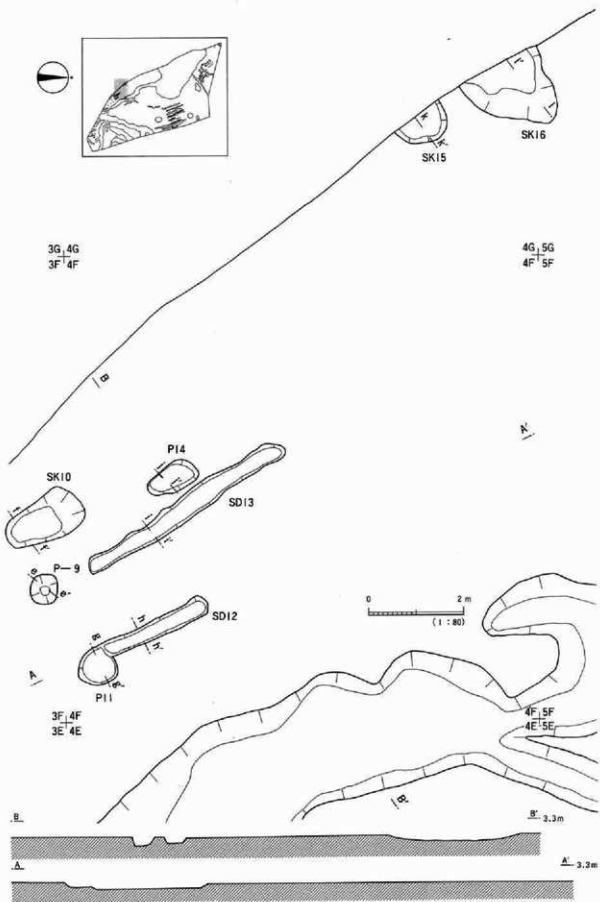
- 1 黒褐色土
- 2 黒黒に炭を含む粘土

SK8



- 1 黒褐色土
- 2 炭を多量に含む砂質粘土





P9



- 1 黒褐色土（灰、土師器片あり）

SK10



- 1 黒褐色粘土（土師器片あり）
2 1より粘質小
3 黒褐色粘土
4 灰褐色粘土
5 黒色炭粉層

P11



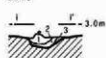
- 1 黒褐色の砂質粘土

SD12



- 1 黒褐色のシルト質粘土
2 1より悪い

SD13



- 1 黒褐色土
2 黒色土に多量の灰を含む
3 灰白色粘土

P14



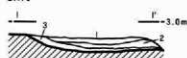
- 1 黒褐色粘土
2 黒褐色土
3 灰白色粘土に灰を含む

SK15



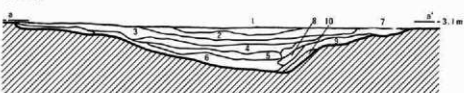
- ① 灰白色粘土
② 暗灰色粘土

SK16



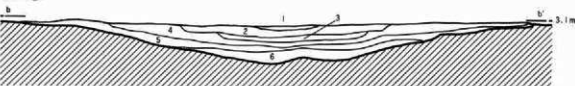
- 1 黒色土に灰を含む
2 暗灰色粘土に灰を含む
3 2に灰を多量に含む

SK17①



- 1 暗青灰色粘土
2 1に黒色腐植土を含む
3 黒色腐植土
4 3よりやや明色
5 3よりやや明色で青灰色粘土のアロックを各所に含む
6 黒色腐植土の堆積層
7 暗青灰色シルト
8 7より悪い
9 7より暗く腐植土を含む
10 青灰色粘土

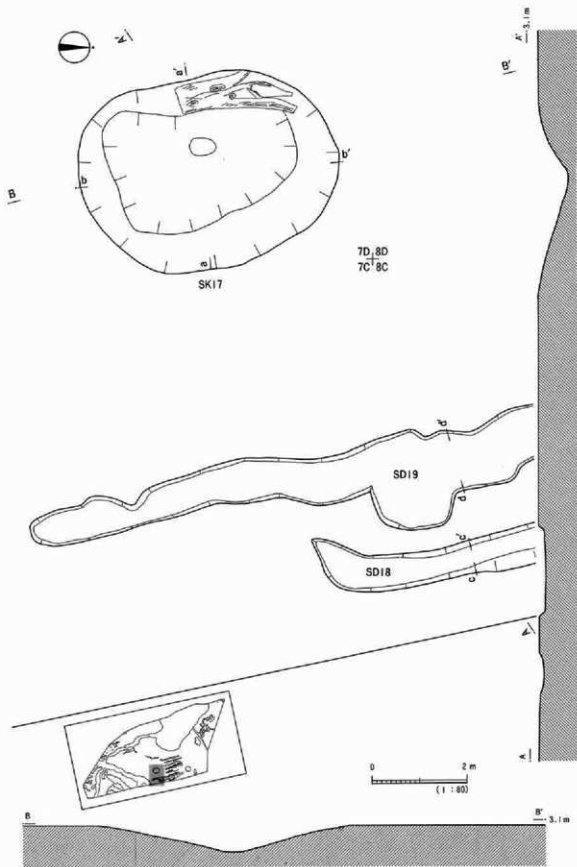
SK17②



- 1 暗青灰色粘土
2 暗青灰色土に黒色腐植土を含む
3 黒色腐植土
4 3よりやや明色の黒色腐植土
5 3より明色で青灰色粘土のアロックを含む
6 黒色腐植土の堆積層



(1:40)



SD18①



- 1 暗褐色土に薄鉄鉱の朱を含む

SD18②



- 1 灰色粘土
2 暗灰色粘土に炭を含む
3 炭のかたまり
4 暗灰色の粘土

SD19①



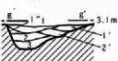
- 1 暗褐色土に薄鉄鉱の朱を含む

SD19②



- 1 灰白色粘土に炭を含む
2 灰白色シルトに薄鉄鉱の朱を含む
3 黒色腐植土に大量の炭を含む

SD19③



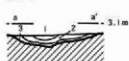
- 1 灰白色粘土に炭を含む
1' 1より暗い粘土
1' 1'より黒い
2 灰白色シルトに薄鉄鉱の朱を含む
2' 2より暗い色
3 黒色腐植土に大量の炭を含む (土層断片あり)

SD20



- 1 黒色土
2 黄褐色シルト
3 青灰色粘土
4 褐色シルト、黒色腐植土を含む
5 暗青灰色粘土

SD21



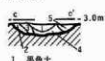
- 1 黒色土
2 灰色土と黄褐色土が混じる、少量の黒い腐植土を含む
3 暗青灰色シルトに黒色腐植土を含む

SD22①



- 1 黒色土
2 暗褐色シルト
3 2に薄鉄鉱の朱を含む
4 青灰色粘土の中に薄鉄鉱の朱を含む
5 青灰色粘土のアロック
6 5に薄鉄鉱の朱を含む

SD22②



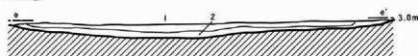
- 1 黒色土
2 暗褐色シルト
3 2に薄鉄鉱の朱を含む
4 青灰色粘土
5 4に薄鉄鉱の朱を含む

SK23①



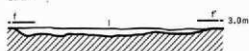
- 1 黒色腐植土
2 灰色粘土に炭を含む

SK23②

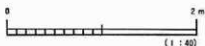


- 1 黒色腐植土
2 灰色粘土に炭を含む

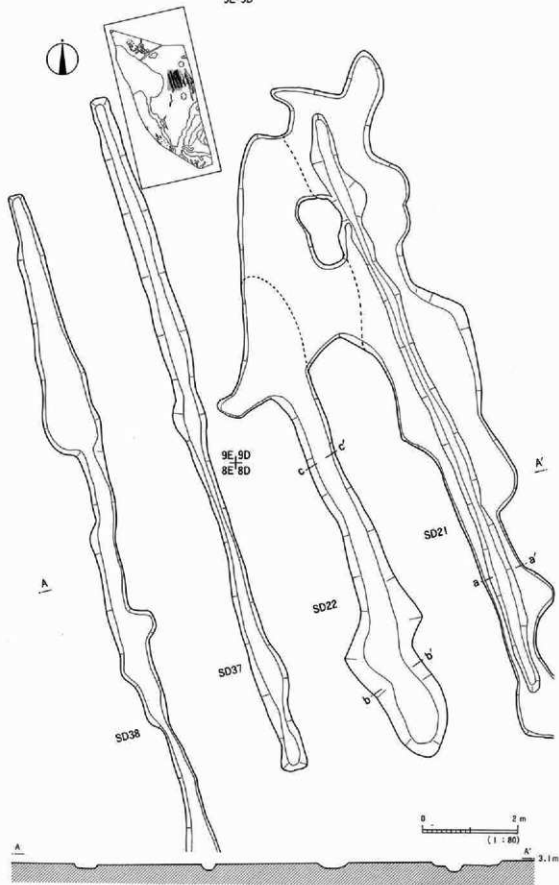
SD24



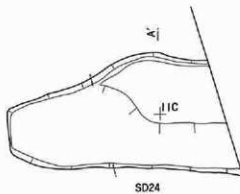
- 1 暗青灰色粘土に薄鉄鉱の朱と黒褐色の腐植土を含む



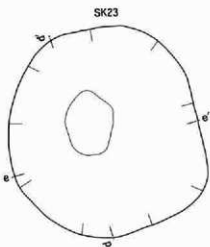
10E, 10D
9E, 9D



0 2 m
(1 : 80)
A A' 3.1 m



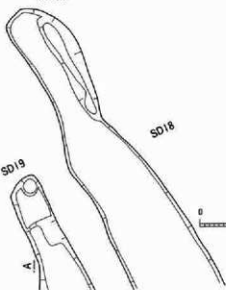
A-A 2.9m



SD24

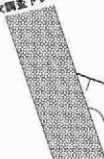
SK23

100, 10C
90, 9C



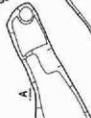
SD18

一次調査トレンチ

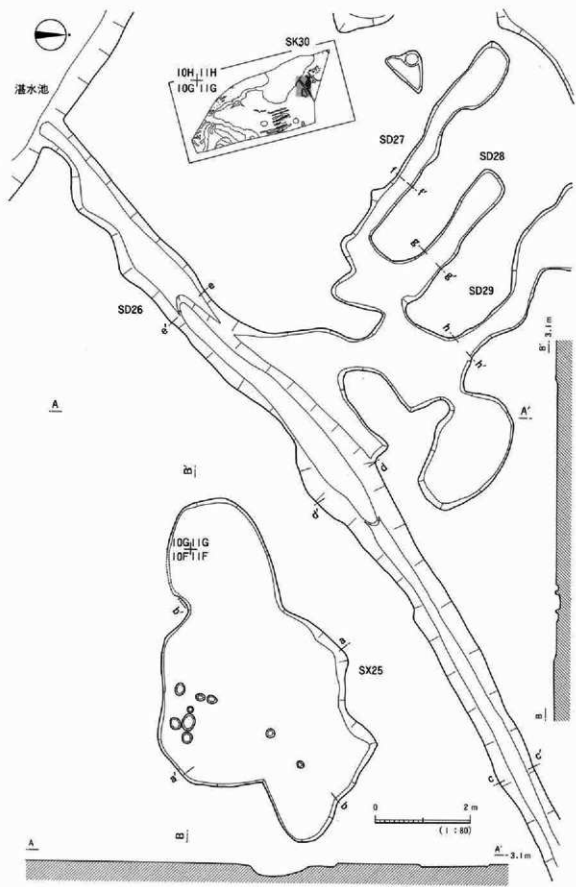


SD20

SD19



A-A



SX25①



- 1 黒色土に炭を含む（土師器片が多数あり）
- 2 青灰色粘土に褐鉄鉱の朱を含む

SX25②



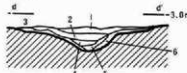
- 1 黒色土に炭を含む（土師器片が多数あり）
- 2 青灰色粘土に褐鉄鉱の朱を含む

SD26①



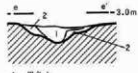
- 1 暗灰色粘土に腐植土を含む

SD26②



- 1 黒色土
- 2 暗青灰色粘土に黒色腐植土を含む
- 3 暗青灰色粘土
- 4 明青灰色粘土
- 5 4に多量の黒色腐植土を含む
- 6 青灰色粘土

SD26③



- 1 黒色土
- 2 暗青灰色粘土

SD27



- 1 黒色土に炭を含む
- 2 青灰色粘土に褐鉄鉱の朱と炭を含む

SD28



- 1 暗青灰色粘土に褐鉄鉱の朱と炭を含む
- 2 青灰色粘土に褐鉄鉱の朱と炭を含む

SD29



- 1 暗青灰色粘土に褐鉄鉱の朱と少量の炭を含む
- 2 青灰色粘土に褐鉄鉱の朱を含む

SK30①



- 1 褐色土に少量の炭を含む（土師器片あり）
- 2 褐色シルトに褐鉄鉱の朱を含む
（ところどころに灰色粘土混じる）

SK30②



- 1 褐色土に少量の炭を含む（土師器片あり）
- 2 褐色シルトに褐鉄鉱の朱を含む

SD31①



- 1 黄褐色シルト
- 2 黄褐色シルトに青灰色粘土を含む

SD31②



- 1 褐色シルトに青灰色粘土が混じる
- 2 黄褐色シルトに青灰色粘土が混じる（土師器片あり）

SD31③



- 1 褐色シルト
- 2 黄褐色シルトに青灰色粘土を含む

SD31④



- 1 黒色土
- 2 青灰色粘土

P33



- 1 青灰色粘土に褐色シルトを含む
- 2 青灰色粘土

P32



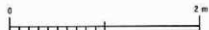
- 1 暗灰褐色土に炭を含む
- 2 暗青褐色粘土に少量の暗灰褐色土と炭を含む
- 3 暗青灰色粘土に炭を含む
- 4 青灰色粘土
- 5 暗青灰色粘土

P34

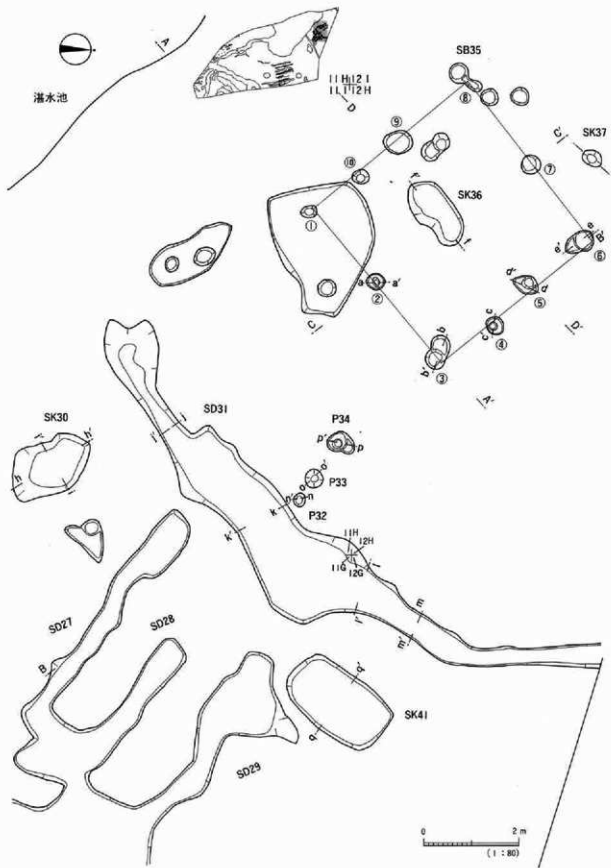


- 1 灰色粘土に黄褐色粘土が混じる
- 2 灰色粘土
- 3 暗灰色粘土と褐色土が混じる
- 4 暗灰色シルトに少量の褐色土を含む

SK41



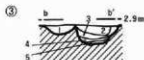
(1:40)



SB35



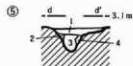
- 1 赤褐色土
- 2 青灰色シルト



- 1 明赤褐色土
- 2 暗赤褐色土
- 3 暗青灰色シルト
- 4 炭のかたまり
- 5 青灰色粘土



- 1 青灰色粘土に赤褐色を含む
- 2 青灰色粘土に褐色を含む



- 1 青灰色シルトに多量の黒色腐植土を含む
- 2 明赤褐色シルト
- 3 青灰色シルトに少量の黒色腐植土を含む、土師器片あり
- 4 青灰色シルトに少量の黒色腐植土を含む



- 1 暗青灰色シルト
- 2 黒色土
- 3 1に黒色腐植土を含む
- 4 3に炭を含む
- 5 明赤褐色に炭を含む

SK36

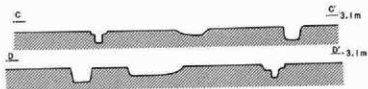


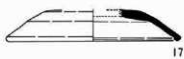
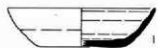
- 1 青灰色シルトに多量の炭を含む、土師器片あり
- 2 炭のかたまり
- 3 2に焼土を含む、土師器片あり
- 4 黒色土に炭を含む

SK37

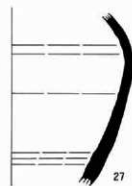
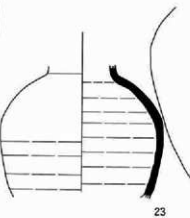
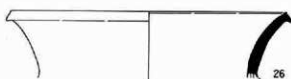
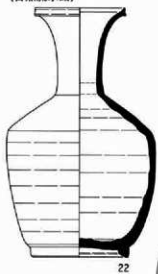


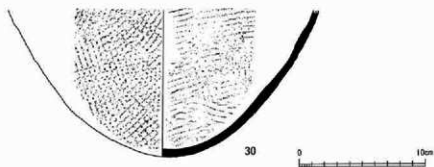
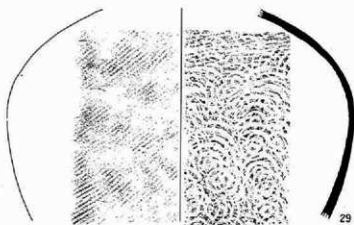
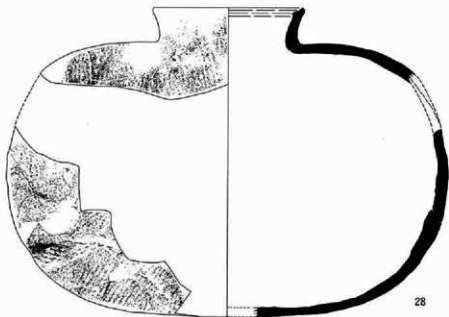
- 1 灰色粘土に炭を含む
- 2 暗青灰色粘土に多量の炭のかたまりを含む





(自然流水路)





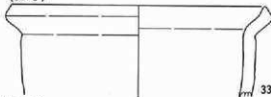
(地区 1)
(P39)



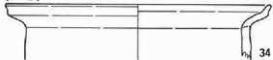
(SD 3)



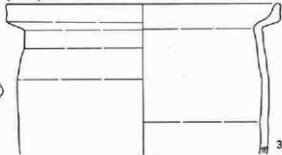
(SD 3)



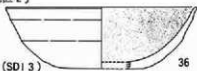
(SD 2)



(SD 2)



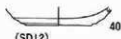
(地区 2)



(SD13)



38



(SD12)

40



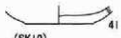
(自然流水路)

37



(SE 5)

39



(SK10)

41



(P6)

42



(SK 8)

44



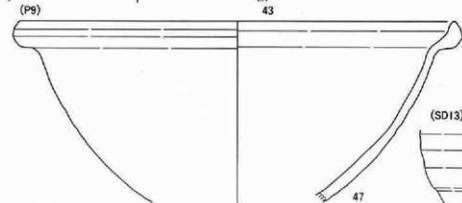
(SK16)

43



(P9)

45



(P9)

47

(SD13)



46

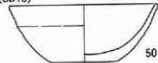
(地区3)

(SD19)



48

(SD18)



50

(SD20)



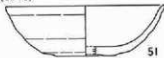
52

(SD18)



49

(SD19)



51

(SK23)



54

(SD20)



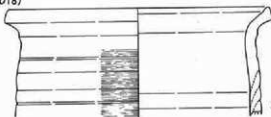
55

(SD19)



58

(SD18)



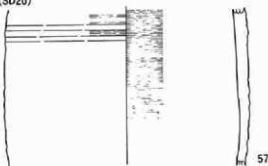
56

(SK10)



59

(SD20)



57

(SK10)



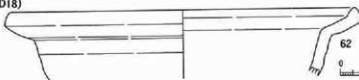
60

(SD18)



61

(SD18)



62

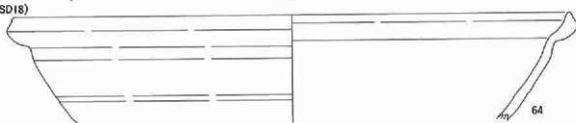


(SD19)



63

(SD18)



64

[地区4] (SD29)



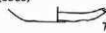
65

(SB35)



68

(SD29)



71

(SD31)



72

(SB35)



66

(SK36)



69

(SX25)



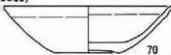
73

(SB35)



67

(SB35)



70

(SB35)



74

(SD26)



75



(SD19)

(SB35)



76

(SX25)

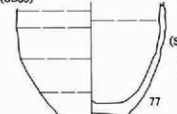


78

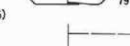


81

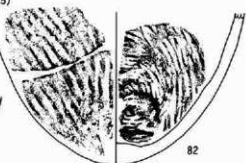
(SB35)



(SB35)



(SX25)



82



(SB35)



80



[遺構外地区1]



83



84



86

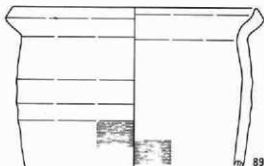


85



87

88

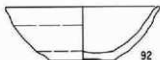


89

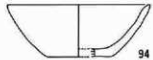
[遺構外地区 2]



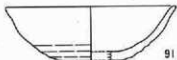
90



92



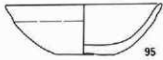
94



91



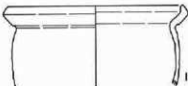
93



95



96



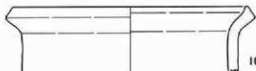
100



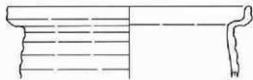
101



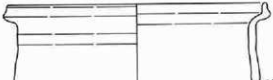
97



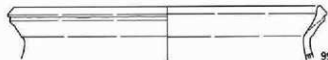
102



98



103



99



104



105

[遺構外地区 3]



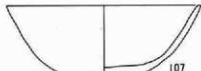
106



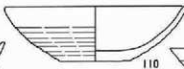
109



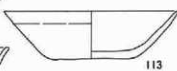
112



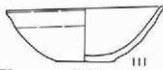
107



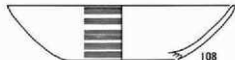
110



113

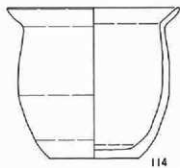


111



108





114



115



117



116



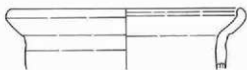
118



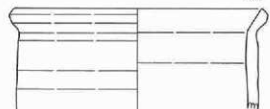
119



124



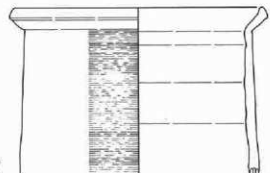
120



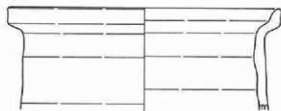
125



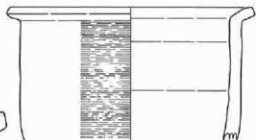
121



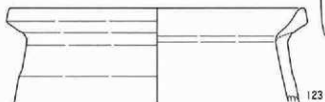
126



122

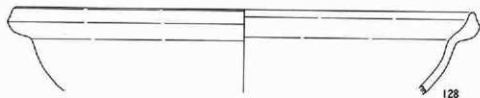


127

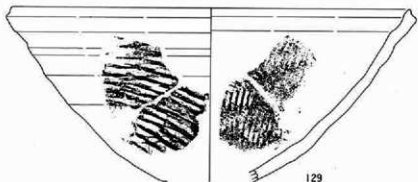


123





128

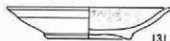


129

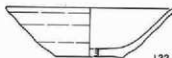
(道橋外地区 4)



130



131



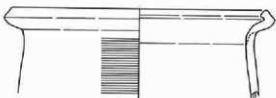
132



133



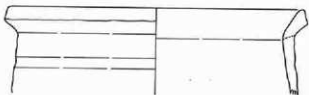
134



135



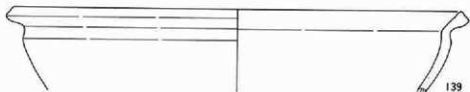
136



137

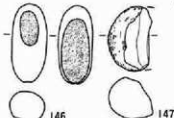
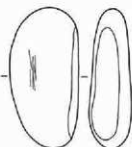
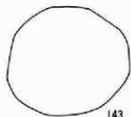
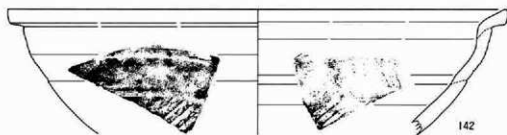
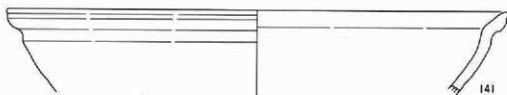
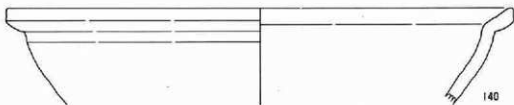


138



139

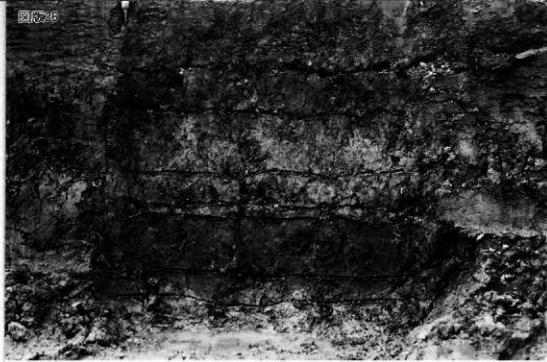




スクリーントーン：擦痕







2. 水田跡完掘
北から南を望む
ハサ木の根



3. 調査区近景
南端から北を
望む
自然流水路に
左右へ枝状のSD



1. 調査区近景
自然流水路 1
自然流水路 2
自然流水路 3
SK38
P39
その他の遠景

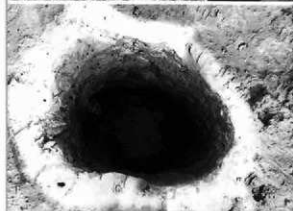


2. 調査区近景
SK17
SD18
SD19
SD20
SD21
SD22
その他の遠景



3. 調査区近景
SX25
SD26
SD27
SD28
SD29
SK30
その他の遠景



左：SB35①
完堀右：SB35②
土層断面左：SB35③
土層断面右：SB35④
土層断面左：SB35⑤
土層断面右：SB35⑥
土層断面

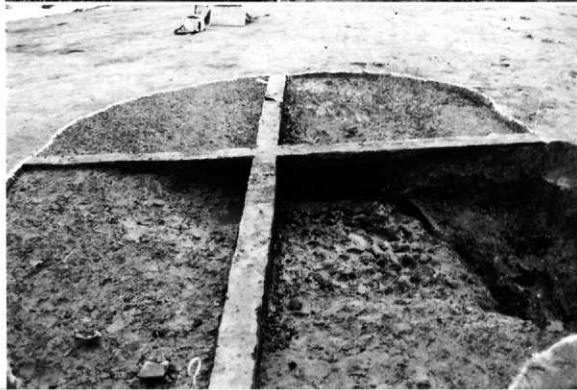


左：SE5之
流水路

右：SK17
完掘



SK17
土層断面





左：自然流水路 1
土層断面

右：自然流水路 2
遺物出土狀況



左：自然流水路 3
土層断面

右：自然流水路 4
土層断面



左：SD12
土層断面

右：SD13
完掘



左：SD18
土層断面

右：SD18
完掘



左：SD19
土層断面

右：SD19
発掘状況

左：SD19
遺物出土狀況



右：SD20
土層断面



左：SD21
土層断面

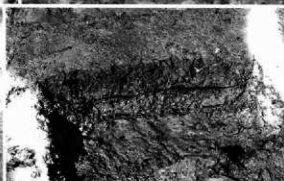
右：SD22
土層断面

左：SD24
土層断面



右：SD26
土層断面

左：SD27
土層断面



右：SD28
土層断面

左：SD29
土層断面



右：SD31
土層断面

右：SK38
遺物出土狀況



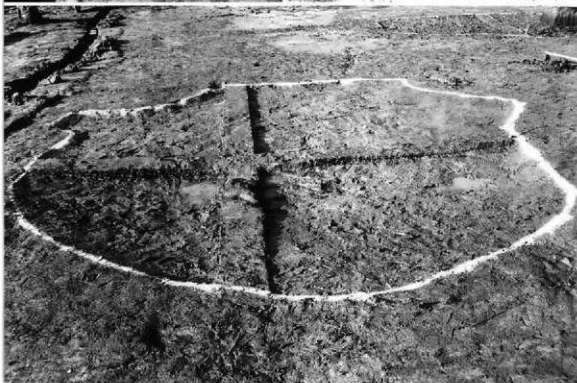
右：SK10
土層断面



左：SK15
完掘

右：SK16
土層断面

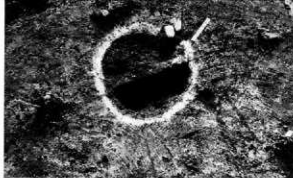
SK23
土層断面



左：SK30
完掘

右：SK36
土層断面



左：P6
土层断面右：P7
土层断面左：SK8
土层断面右：P9
土层断面左：P11
完堀右：P14
完堀左：P32
土层断面右：P33
土层断面左：P34
土层断面右：P37
土层断面



左：SX40
完掘

右：SX40
周辺の出土
状況



SX25
土層断面と
遺物出土状
況



自然湛水池
南南東から
自然流水路
が流れこみ
西側には土
器の破片が
多数出土



1



10



16



2



11



17



3



13



18



5



12



19



6



14



1 : 2

20

21



7



15

(内面黒色土器) 1 : 2



8

(内面黒色土器) 1 : 3



36



90



9



66

(内面黒色土器) 1 : 3



130



90

66



131



28



28



23



29



29



22



24



24



26



25



26



25



30



31



69



93



37



83



94



38



84



110



67



91



111



68



92



113



114



135



43



96



126



127



77



79



54



56



56



137



137



35



35



57



45



81



88



82



81



88



82



140



141



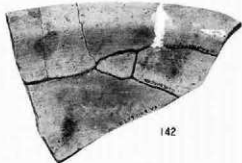
142



140



141



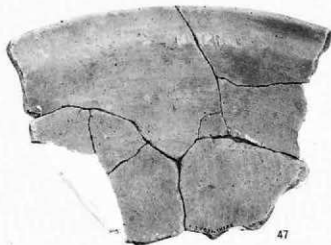
142



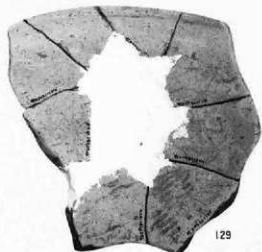
47



129



47



129



70



133



142



77



111



123



84



48



7

(1:3)



143



144



145



147



148



148

報告書抄録

ひみ こう								
書 名 上 郷 遺 跡 I								
副 書 名 横雲バイパス関係発掘調査報告書								
シリーズ名 新潟県埋蔵文化財調査報告書								
シリーズ番号 第 62 集								
編 者 名 名 赤羽正春・高橋知之								
編 集 機 関 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団								
所 在 地 〒951 新潟県新潟市一番通町5923-46 TEL. 025-223-5642								
発 行 年 月 西暦1994年3月31日								
所収遺跡	所 在 地	コ ー ド		北緯	東経	調 査 期 間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上郷遺跡	新潟県中蒲原郡 横越村 横越字上郷	323	8	37度 50分 29秒	139度 08分 40秒	第一次調査 1990022～19901026	700㎡ 7000㎡	横雲バイパス 建設に伴う発 掘調査
						第二次調査 19920722～19921120		
所収遺跡各	種 別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物		特 記 事 項		
上郷遺跡 I	散布地	平安 9世紀末～ 10世紀初め	溝17条 土坑7基 井戸1基 獨立柱建物跡1棟	土師器・須恵器		低湿地開発の跡		

新潟県埋蔵文化財調査報告書第62集
横雲バイパス関係発掘調査報告書
上郷遺跡 I

平成6年3月31日印刷
平成6年3月31日発行

編集 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒950 新潟市一番通町5923-46
電 話 025 (223) 5 6 4 2
F A X 025 (228) 1 7 6 2
発行 新潟県教育委員会
〒950 新潟市新光町4-1
電 話 025 (285) 5 5 1 1
財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
印刷 株式会社
〒950 新潟市鏡口1-10
電 話 025 (244) 8 2 5 5

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第62集『上郷遺跡1』 正誤表

頁	位置	誤	正
抄録	北緯 (旧座標)	37度50分29秒	37度50分38秒
抄録	東経 (旧座標)	138度08分40秒	138度08分45秒